平成27年12月1日発行第12巻第6号通巻98号

人気同人ゲーム『魔剣士リーネ』小説化情報も!!

ドリームマガジン

cover illustration by FCT

2D DREAM MAGAZINE

立ち読み版

2015 12 Volume.85 1,080【税込】yen

今号の Special Fetishism Series 特集

異種姦孕ませ

「化け物なんかに……孕まされたくないっ」

触手、オーク、獣人、巨大モンスター――

おぞましい化け物たちに欲望のままに犯され孕まされる!

【表紙&ピンナップ テレホンカード 応募者全員サービス】

【えっちマンガ&4コママンガ】

野晒惺

焔すばる

天海雪乃

ばふぇ

緋乃ひの

嘉納あいら

【連載&読み切り小説】

最終回 final episode

イセリア英雄戦記

栗栖ティナ×牡丹

最終回 final episode

姫騎士会長アイラ

新居佑×コザ

高岡智空×草上明

千夜詠×九反

木森山水道×りょう@涼

斐芝嘉和×FCT

いよいよ最終回

深淵戦隊クトゥルンジャー

からすま弐式

カラーピンナップ color pinup

期待の新作美少女ゲーム

『ディバインハートSP』小説付き!

KAGEMUSYA

うるし原智志／FCT

18 未満

凛々しきモンスターハンターが
産卵繁殖の苗床にされる!!!!
小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION FCT
獄獣淫産
～女剣士フィア～

「ちぃぃぇえええいっ！」
横薙ぎに振るった剣に、重い手応え。
熊よりも大きな魔獣が吠えて反り返り、その反動を使って鋭い鈎爪を繰り出してくる。
最寄りの街から徒歩で一昼夜離れた森の奥底。
燦めく金色の髪を靡かせつつ、流浪の女剣士フィアが趨り、飛ぶ。
毎年生娘を生贄に要求する魔物を、住民からの依頼で倒しにきたのだ。
「遅いッ！」
顔面に向けて迫る巨大な爪を、肩に担いだ剣で弾き、さらに踏み込むフィア。魔物の足下で深く身体を沈め、転瞬、全身をバネにして飛び上がり――。
「閃・疾・斬ッ！」
魔力を引き出すトリガーボイスを叫びながら両手の剣を縦横に振る。
目を灼かんばかりの閃光が弾け、耳を聾する雷鳴が轟いて――一拍置き、胸に幾筋もの深手を負った魔物が、地響きを立てて仰向けに倒れた。
「――ふぅ。危ないところだった……」
ようやく構えを解いたフィアが、安堵の吐息とともに剣を鞘に戻す。傷ひとつ負ってはいないが、装備にチャージしていた魔力をすべて使い果たしてしまった。最後の一撃を耐えられたら、勝ち目はなかったかもしれない――と。
「……ッ⁉」
立ち去りかけたフィアの背に、不意に走り抜ける悪寒。ハッと振り返ると、仰向けに倒れた魔物の胸、ドス黒い血を噴き出している傷口から、不気味な色の触手がぞわぞわと溢れ出していた。
「ま、まさか……これが本体ッ⁉」
慌てて剣を引き抜くが、一瞬遅く、鞭のように飛んで来た触手に手首を叩かれる。
「あ……ッ⁉」
と叫ぶ間もあらばこそ。
――しゅるっ！　しゅるるっ！
ぞわ、ぞわぞわ……むきゅ、ぶきゅっ！
湿った音を立てながら次々と溢れ出す触手の群れが、流れるように地を這ってフィアのうしろにまで回り込んだ。
足を取られ、バランスを崩す。
気味の悪い糸を引きながら宙を飛ぶ肉紐に胸を突かれ、仰向けに倒されてしまう。
「ち、いいいっ！　放せ……離れろッ！」
慌てて手を伸ばし、足首に絡みついた触手を引き剥がそうとするが、その隙に肩に絡みつかれた。身体を捻り、払い落とそうとすれば、今度は肘を搦め捕られ下腕を呑み込まれ、バンザイの格好に引き伸ばされそうになる。
「こ、これ……性魔ッ⁉」
獣に寄生し、内部で成長して、人間の女性を襲うおぞましい魔物。切り刻んでも断片のひとつひとつが別の個体になるし、重なっていればいつの間にか融合して巨大化するという、厄介な敵だ。
しかも――。
「うっ⁉　や……ヤダッ⁉　ふ、服の中に……ああダメ、入って、来る……ッ⁉」
先端を細く分岐させて手のようになった触手が、フィアの鎧を器用に押し退け、シャツの中にまで潜り込んできた。いやらしくぬめる弾力に、若く瑞々しい乳房がムニュッと揉まれる。
「くぅう……ッ⁉」
おぞましさに呻くと、今度は脚が濡れた手に掴まれ、膝を強引に割られて、
「あ……ッ⁉　ああダメ、そこは……くぅっ⁉」
指より器用に蠢く触手が次から次へとスカートの中に潜り込み、乙女の秘処を守る薄布へ、競うように殺到してくる。
――だけではない。
「え……あっ⁉　う、嘘……ッ⁉」
倒れた魔物の胸を内側から押し退けるようにして、性魔本体がのっそりと起き上がった。一応獣型ではあるようだが、半分溶けているような、全体が歪で細部が不定形で、ほかのどんな生き物にも似ていない不気味な姿。
その、身体のあちこちから幾本も生えている触手が、蛇のようにくねりつつ、蕩けた蛾のように流動しながら、フィアの身体に迫る。
「く、あ……は、放せぇえっ！」
蒼褪めて藻掻くうちにも性魔本体はムクムクと膨れ上がり、前のめりになって、圧倒的な存在感で獲物の上にのし掛かってきた。
自重を支えるためか、脚らしきものが太くなる。首や胴体もおおよその形を整え、より獣らしくはなったが、しかし脚は六本以上。
フィアにのし掛かった胴体が己の重さに負けて傾くと、すぐに新しい脚が生えて倒れるのを防ぐ。重みから解放された脚は胴体に吸収され、代わりに別の部分からより多くの触手がぞわぞわと生え出す。
「クソッ！　この……うっ⁉　ぷふっ⁉」
歯噛みする女剣士の顔に生臭い粘液の滴が一粒、糸を引いて落ちた。強張る頬から唇にかけて、いやらしく粘着く。
（な、なんとかしなければ……うっ⁉）
蹴り剥がそうとして動かした脚の内側に、気味の悪いぬめりが触れた。ハッと首を上げ、脚の間に目をやれば――。
「……ひっ⁉　あ、あああっ⁉」
半透明の、一際太い触手が、臨戦態勢の男根のように猛々しく反り返っている。
その内側に見える楕円形の物体は、性魔の卵だろうか？　アレを、あんなおぞましいモノを、フィア

著者近況
プロ野球の某球団で引退ラッシュ。球団の顔だったあの大投手まで……ひとつの時代が確実に終わりました。
っていうか、プロ野球の選手がみんな年下になってしまった。例年以上に秋風が冷たい今日このごろです。

の子宮に産みつけるつもりか。
「や、やめろ……やめろ、やめろぉおっ！」
上擦る声で叫び、必死になって藻掻くのに、腕や脚は流動する触手の群れに押さえつけられてほとんど動かせない。虚しく揺らす腰にも細い手のような触手が這い回り、スカートの中で下着を脱がされ、乙女の秘処を露わにされてしまう――と。
「あぅン……っ!!」
発した本人が思わず赤面してしまうような、鼻にかかった可愛い甘え声が漏れた。
気持ち悪い粘液に濡れた触手の先、指より器用に蠢く細い先端が、フィアの淫核に触れたのだ。
「あっ!! な、なにを……やぅンッ!!」
快楽神経の塊が、冷たく濡れた細い弾力にキュッと抓まれ、蛇の舌のように閃く先端に軽く弾かれて、快感の稲光を発し始める。
（こ、こんな、魔物に……こんな気持ち悪い、化け物……にっ！）
もっとも大切でもっとも恥ずかしい場所を、いままでだれにも触らせたことのない、それどころか見せたことすらない秘処を、おぞましい性魔にいいようにまさぐられている――耐えがたい恥辱はしかし、怒りには結びつかなかった。
「やだ、ダメ……ぁあぅッ!! ひぁ……あふっ!! く、ンくぅぅッ!!」
割れ目の縁に膨れ上がる、抗いがたい淫悦。
さらに分岐していっそう細くなった触手に、クリトリスの根元をキリキリと締め上げられたのだ。別の触手が先端を尖らせ、紅く膨れた肉豆の側面を舐めるように撫でるようにピトピト、ピトピト。
（だ……ダメなの、にぃっ！ き、気持ち悪い……はず、なの……にぃいっ！）
弄り回された肉芽から脳天に向けて、次々と走り抜けていく快感の突風。
獣型のおぞましい魔物に押さえつけられた細身の身体が、そのたびに捩れ、反り返り、蒼褪めていた柔肌に艶めかしい桜色の火照りが広がり始める。
さらに――。
「うぅ、ンぅぅ……うっ!! あ……ッ!! ダメ、ダメ……そこ、開く、なぁあっ！」
スカートの中で秘かに熱を帯び、ほんのりと赤らんでいた繊細な肉畝に、冷たくぬめる触手の指が引っ掛けられた。
と思う間に、クイッと左右に開かれる。
「くぅんっ!!」
いつの間にか蜜まみれになっていた粘膜花弁が愛液の滴を飛ばしながらプルルンッ！ と咲きこぼれ、新たな肉悦が一気に膨れ上がる。
（あ、あああ……なんて、こと……ッ！）
自分の身体が、こんなにも感じやすいとは――。
生まれて初めて知った恥辱に頬を赤らめているうちにも、太股の付け根から背に腹に、肉悦の波紋が次々と広がる。クリトリスを弄られたときのような鋭さはないが、ねっとりとして甘く、痺れるほどに心地よく、腰から下の感覚が瞬く間に薄れていく。
オ……オォオオ……ッ！
不定型な身体のどこかで甘酸っぱく熟した牝の匂いを嗅いだのか、フィアにのし掛かった獣型の魔物が歓喜に震え、太い声で吠えた。
股間と思しき場所にそそり勃つ半透明の淫棒が、みるみるうちに大きくなる。透けた側面におぞましい血管の網目を浮かべ、太さと硬さを増して――透明な滴を垂らしながら揺れる切っ先を、フィアの秘処へ、ゆっくりゆっくり近づけていく。
「や……め……ろぉおっ！」
必死に叫んだつもりの声が、艶めかしく揺らいだ。
徐々に迫る産卵管に呼応したように、秘裂を掻き分けた触手や淫核に絡みついた肉紐が、いやらしい動きを強めたのだ。
ぬちゅ、くちゅ、にちゅ――と音が立つほどに掻き回され、揉みしごかれる粘膜花弁。
淫唇より感じやすいクリトリスは根本を締められて痛いほどに勃起し、側面や頂点を無数の触手にぴちょぴちょぺたぺた愛撫されている。
「ふぁ……ンくっ!! ふ……ンぅぅっ!!」
ひっきりなしに背を駆け抜けていく、鋭い淫悦。
そのたびに身体が捩れ、反り返る。
全身から甘酸っぱい牝香を含んだ濃密な汗が噴き出して、抗う意識が徐々に徐々に、桃色の靄に侵蝕されていく。
弄られているのは秘処だけではない。
袖や裾、襟口から潜り込んできた手のような触手に、形良い乳房がムギュッムギュッと揉み潰されている。柔肌に擦り込まれた冷たい粘液に催淫作用があるのか、痛いはずの圧力がどうしようもなく気持ちイイ。左右の丸みが内側から火照り、敏感な乳首が弾けんばかりに勃起して、
「ンくっ!! ふ……ンぅぅっ!!」
身動ぎするたび、いや、息をするだけでも、シャツの裏地に擦れて稲光のような快感を発しまくる。
（だ、ダメなの、に……イヤ、なの……に……初めて、なの……にぃいっ！）
脚の間に揺れていた性魔の巨根の切っ先がスカートの中へ隠れると、淫らな予感が膨れ上がり、胸の鼓動が跳ね上がった。
心は拒んでいるのに、身体は求めている。
男を知らないはずの処女肉洞が細かな粘膜襞をそわそわと際立たせ、ヘソの裏側、牝の性欲を司る子宮が、人外の悦びを予感してはしたなく煮え滾る。
「やめろ、やめろ……ンぁっ!! う、ンくぅっ!!」
スカートの中、細い触手によってあられもなく割り開かれていた秘裂に、グリッと強い圧力。

著者近刊 『淫妖蟲凶～凌蝕病棟退魔録～ 姦禁蟲嬲り』『アリシア 淫獄の姫騎士』『トリプルとらぶるプリンセス』『凌辱レオタード ～淫獄に堕ちた女子高生～』『若妻の秘蜜 堕ちゆく美沙子の爛れた日々』 好評発売中！

姫騎士会長アイラ
背徳の接待快楽
最終話
姫騎士会長、完全屈服
守れなかった学園
わたし、正直になるね！。
騎士として、生徒会長として、カノジョとして
隠しきれなくなった真実。
小説／新居佑
NOVEL
挿絵／コザ
ILLUSTRATION

長かった夏休みが終わりを告げ、魔法騎士育成校である聖アザリア学園も、生徒たちの活気あふれる新たな学期へとその景色を変えていった。

「あぁっ!? ご、ごめんなさいっ！ 急いでいたからっ……はぁ、はぁっっ！」

九月になって、幾分和らいだかのように感じる暑さの中、魔法騎士科の一年生である春日巧は、大きく腕を振り、息をきらしながら、放課後の廊下を駆けていた。

あまりに急いでいたために、何度か道行く生徒や教師たちと肩をぶつけてしまう。なぜか相手が自分を憐れんだような瞳を向けてくるが、深くは気にせず、軽い会釈と謝罪の言葉だけを残し、その歩幅、その走りをさらに大きく、加速させていく。

（やっと会える……っ。今すぐ行くよ、アイラっ！）

恋する少年特有の、跳ねるような熱い想いを胸に抱いたまま、学園の生徒会長室の前にたどり着く。

夏休みが始まるより前——もっと言えば、アイラが騎士の仕事で忙しくなる三ヵ月前までは、毎日のように出入りしていた扉の前で、巧は胸に手を置いて、大きく深呼吸し、高鳴る心臓の鼓動を落ち着けようとする。

登場人物紹介

蘇芳アイラ

聖アザリア学園の生徒会長。国内でも数人のS級魔法騎士資格保持者でみんなから慕われている。

春日巧

魔法の授業が苦手でお世辞にも強いとはいえないアイラの彼氏。純粋で優しく愛らしいルックス。

小寺仁三

国内でも有名な政治家。魔法騎士を育成する学園を買って、自分の利権のために利用している。

前号までのあらすじ

仁三の命令である組織を強襲したアイラは不意を突かれ捕まってしまう。男たちの性欲の捌け口にされそうになるも、逃げ出すことも可能だったアイラに芽生えた快楽のために犯されたいという欲求は、簡単に彼女を支配し異様な輪姦劇が始まった。

（だ、だめだっ。全然静かになってくれないよ。夏の合宿で……その後の試験で、あれだけ実践できたことなのに……っ）

胸に触れたままの、右の手のひらに伝わるドクンドクンッ！ という早鐘のような心の昂りに、巧は自分がどれだけアイラに恋をしているかということを強く実感させられる。

日本、いや世界でも数少ないS級騎士のライセンスを、わずか十代にして取得し、数々の有名犯罪を取り締まってきた蘇芳アイラ。

家柄、ルックス、性格ともに申し分なく、巧はおろか、学園……日本中から愛される魔法騎士界のアイドル的存在だ。さらに学園の生徒会長、そして理事代行を務めながら、後進の育成にも積極的である。

そんな彼女にふさわしい男になりたい——。初めはそう淡く思っていた想いに、男としての情熱の火が点いたのは、夏のはじめ、夜の湾岸倉庫でアイラが一人、闇組織相手にボロボロにされた姿を見たときだった。

憧れているだけじゃいけない。本当にアイラのカレシでありたいならば、青春のすべてを懸けて、本気で騎士になろうと努力しなければいけないっ！

そう心に誓い、濃密な鍛錬を続けた巧は、とうとう先日行われた試験に合格し、S級騎士であるアイラと、犯罪現場で共闘できる、A級騎士の称号を手に入れることができた。

S級には劣るが、その称号は魔法騎士科を優良で卒業した者の、さらに半分ほどにしか与えられない十分に稀有なものだ。

才能がないと周りから評され、自身でもそう思っていた巧が、短期間で奇跡のようなレベルアップを成し遂げられたのは、日頃のアイラの手とり足とりの指導と、彼女を想う強い恋、いや愛情のためなのだと強く思う。

生徒会長でありながら、先日の始業式はおろか、二学期が始まってから、一週間も学園に出席していないアイラ。まさかあのときの怪我が……!? と思った矢先に、アイラから一通のメールが届いたのだ。

『巧、二人きりで会いたいから、いつもの場所へきて』

いつもアイラと逢瀬を交わしていたのは、アイラのプライベートルームでもある、生徒会長室だ。そこで彼女が待っている。

修練と試験に没頭してきたため、夏休みの一ヵ月間、恋人同士の一番楽しい季節を、アイラと共に過ごせなかった。けれどようやく会える。A級騎士になれたという、最高の報告を知らせることができる。

（でも伝えたいのはそれだけじゃないよ、アイラ。僕は君に——）

巧は右手を制服のズボンのポケットに当て、アイラに渡す予定の、もうひとつのプレゼントを確認する。

夏、デートのひとつにも連れていくことのできなかった、アイラに対するお詫びと愛情、そして感謝の気持ちを込めた、とびっきりの贈り物である美しい指輪だ。

しかも今日は、こちらから贈るばかりではない。

男として現金な話だが、初めてアイラに口でしてもらったあの日、『次の試験で、いい成績を残せたら、アイラの処女をもらえる』という、約束をようやく果たしてもらえるのだ。

まだ若く、初心な巧の劣情が先走って、思わずズボンを高く押し上げてしまう。さすがにアイラに失礼だと思いながらも、無垢な恋慕と共に、あんなに素敵な彼女の処女をもらえる、という牡欲求で、妙に顔がにやけてしまう。

「だ、だめだめっ。僕はアイラを一生幸せにするんだ。そのために立派な騎士に……。アイラの処女は

別に……うぅ」
煩悩を打ち消そうとすればするほど、顔が真っ赤になり、股間の若い牡棒がきつくそそり立ってしまう。これ以上、間をおくと、アイラに出会った瞬間、彼女を恥ずかしがらせてしまうかもしれない。
「よ、よし……いくぞっ。ア、アイラ――」
覚悟を決めた巧が、生徒会長室のドアを開ける。しかし彼の穏やかで、穢れを知らない瞳に飛び込んできたのは、不自然に生徒会長室に置かれた、六十インチの大型モニター。そしてそこに流れる、見知った少女の衝撃的な映像だった。
「んじゅぶっっっ。じゅぶんっ！　あぁ、こんなことって……んぐじゅっ、じゅずるうぅっ！　おほぉんんっ！」
「ははっ、春先に世話になった強気の姫騎士様とは思えない、無様なひょっとこフェラだな。どうだ、初めて咥えるカレシのチンポの味はぁ？」
「お、【親子】でどこまで【私たち】を貶めれば……っ。小寺（こでら）、洋介（ようすけ）……ぇっ」
アイラは下卑た口調で言う小寺洋介を睨みつけた。
美しいブロンドの姫騎士は、ベッドの上で静かな寝息を立てている、愛する恋人である巧のペニスを、思い切り口を大きく広げ、根元から先端まで、丹念に舌を絡めながら、ジュポジュポッと淫猥なフェラチオを余儀なくされている。
その表情は明るく凛とした生徒会長のものには程遠いものだった。美しい相貌は頬だけでなく、耳まで真っ赤に染められており、透き通った声を奏でていた唇からは、はぁはぁっと熱く艶っぽい吐息が、絶え間なく吐き出され続けている。
服装は学園指定の麗しい制服だが、その胸の部分は、無残に下半分が切り抜かれたデザインに変更されている。
春と比べて、さらにボリュームを増したように思える、アイラのタプンッと揺れる爆乳には、すでに大粒の汗が浮かんでおり、左側は魅惑の下乳が丸見えで、右の乳房にいたっては、隠すことも許されていない。
収穫したばかりのスイカのように、たわわに実ったバストは、アイラの切なげに震える、わずかな身体の動きに合わせて、ブルンッと煽情的に揺れ動き、目の前の憎き男のいい目の保養対象に堕落させられてしまっている。
下半身も、それを指示した人物の悪意と牡欲がにじみ出たかのようなデザインに変更されており、ミニスカートは、気品ある少女の恥部を隠すことさえ許されない短さにまで切りそろえられている。
その制服は、アイラが誇り高きエリート魔法騎士であると同時に、伝統と格式のある聖アザリア学園の生徒会長であるという事実を、この上なく視覚的に表すものだ。
と同時に、国民から『幻惑のワルキューレ』とまで讃えられ、そして悪党たちから怖れられた美少女騎士が、一匹の牝豚に完全調教されつつあることをも、明示していた。
「せ、せめてホテルで……っ。あぁっ、いっそ公園のトイレでも、この前の豚小屋でもいいから。お願い、この部屋だけはどうにか……っ」
「バカな女だな。ココで……相手がソイツだからおもしろいんだよ。くく、姫騎士様の完堕ちショーを撮影するには、最高のロケーションだろうがっ」
八月もあと数日で終わりを迎える頃。時刻は深夜。場所は聖アザリア学園の敷地内にある学生寮の一室だ。
ほとんどの生徒が実家に帰省している中、この部屋に暮らす巧は、連日の訓練の疲労――そして洋介の仲間が事前に盛った強力な睡眠薬によって、敏感な肉棒を恋するアイラの膣内に挿入しているにもかかわらず、ぐっすりと寝入ったままだ。
（まさか最後の仕事が、こんな男のいいなりになることだなんて……っ。ごめんなさい、巧っ。あなたまで巻き込んでしまって……ぇっ）
湾岸倉庫で男たちに輪姦された後、もう心身ともに限界を迎えていたアイラだったが、巧に迷惑をかけてはいけないと、一人、小寺仁三（じんぞう）の元へと戻っていった。
それから一ヵ月あまり。夏休みということもあり、これまで主に夜だけだった淫らな売春行為を、小寺仁三の命令するがままに、一日中、下卑た連中の前で行ってきた。
女としても、騎士としても耐え難い屈辱の中、借金返済の期限ギリギリというところで、ようやく最後の依頼にまでこぎつけることができたのだ。
この仕事を完遂することができれば、無事に負債を返すことができ、聖アザリア学園を存続させることができる。それなのに――。
「まあ、お前がなんて言おうと、このとっておきの【AV撮影】が終わるまで、お前は俺たち親子に逆らえない。逆らえば借金が返せなくなるだけじゃなく、そこのガキをたたき起こして、今までお前がされてきたことを、全部バラすこともできるんだからな、ハハハッ！」
男は下品な高笑いをしながら、アイラの数々の卑猥な映像が記録されたディスクを、プラプラと見せつけてくる。
小寺洋介……仁三の息子にして、魔法騎士気取りの悪童であり、アイラ自身が春にきつい仕置きを下した因縁の相手――。
身体は確かに筋骨隆々で鍛えられているが、日頃の修行の結果ではなく、サロンで焼いただけの黒い肌に、チャラチャラとしたアクセサリーをつけた格

著者近況　今回で最終回となります。連載が終わっても、まだ書き足したいエロエロな部分や新規のアイラの変態調教アクメシーンを収録したノベルズも出ますのでどうかよろしくお願いします。

好は、とても礼儀正しい騎士のものとは思えない。

そんな洋介は今、高性能の動画カメラを手に、眠ったままの巧に、アイラが騎乗位で跨っている様を、充足感に満ち溢れたニヤニヤした表情で、撮影している。

この男が撮影するAVに主演女優として出演すること。それがアイラに課せられた最後の試練だ。たった一本出演するだけで、残り一千万あまりの借金すべてを賄えるだけの報酬が用意されている。

しかし彼がアイラに命じたシチュエーションは、『寝ているカレシのチンポを咥えて、カメラの前で、イキまくれ』という、あまりにも屈辱的なものだった。

「それにしても、カメラ越しにお前の身体を見てると、よぉくわかるぜ。半年近く、媚薬に呪印、セックス漬けで、マンコが奥から疼いて、どうしようもねぇんだろう？　くく、いい絵が撮れそうだ。おら、さっさと女優らしく腰振れよっ！　カレシのチンポで、思い切りヨガってみせろ、牝豚がぁっっ！」

言った洋介が立ち上がり、バシィンッッ！　とアイラのお尻を思い切り引っぱたいた。

「ひぎぃぃっ！　た……巧、許して。あ、あぁっ。くっ、あっ、んひぃぃぃっ！」

ジュブジュブッッ！　ズチュンッッ！

まるでお尻を豚のように叩かれることが、合図であるかのように、アイラは眠ったままの巧の勃起ペニスを、騎乗位で膣内に挿入すると、自らの意志で、その艶やかなお尻を上下に動かし始めた。

すでに洋介の命令によるフェラチオによって、若い牡の猛りをギンギンに尖らせているカレシの肉棒。それが、度重なる調教と悪夢の魔術刻印によって改造された、性に飢えた牝豚のような濡れ濡れの淫膣によって扱かれ、ヌチヌチとたまらなく恥ずかしい男と女の発情音を響かせる。

そして唇から漏れ出る声には、カレシとの背徳セックスを強要された、騎士としての屈辱のものではなく、確かな牝の嬌声が色濃く部屋に響き渡っていた。

（はぁはぁっ、だ、だめぇっ。悔しいのに声が出るっ。お尻叩かれて、チンポ咥えさせられたら、もう我慢が……ぁっ）

淡い照明にライトアップされたアイラの女体に、肉感的な陰影が浮かび上がる。洋介の趣味によって改造された制服は、卑猥極まるデザインで、姫騎士であり、生徒会長というアイラの清廉な肩書との、背徳的なコントラストを醸し出す。

「おぉっ、さすがにエロいなぁ。どうだ、アイラ。愛するカレシのチンポの味は？　その悔しそうな反応……付き合ってるくせに、下の口で咥えるのは初めてってとこかぁ？」

「なッ…そんな、ど、どうだっていいでしょ！　はぁはぁっ……あうんっっ！」

（バ、バレたぁっ、こんな男にっ。くぅっ、許さない……絶対に許さないっっっ……けどぉぉっ！）

口にするのも恥ずかしい恋人同士の性関係を、こんな男に……しかものちにAVとして収録される現場で暴露されてしまったことに、たまらない屈辱感を覚える。

この動画は、小寺親子の立場上、表の世界には決して出ないものらしいが、アンダーグラウンドな闇の住人たちはその限りではない。

闇組織から多大な恨みと煽情的な眼差しで見られているアイラの痴態ともなれば、いったいどれだけの悪党たちのズリネタにされてしまうのか……。考えただけでも、悔しさで頭がおかしくなりそうになる。

（私が頼りないせいで、こんな……あぅっ、巧のオ、チンポで！　ダメ、なのにぃっ）

アイラ自身だけではなく、罪もない巧、そして王族の血を引く蘇芳家の名誉すらも汚されている。そう頭では思っても、身体は肉欲に正直だ。そう作り替えられてしまったのだと、死にたいくらいに痛感する。

「んはぁっ、くぅっ……ほぅっ、ん、おぉぉっっ！」

ズチュリッ、ヌチュゥッッ！　ズンズンンンッッ！

仁三によってパイパンにさせられたアイラと、まだ薄っすらとしか陰毛が生えていない巧。その結合部から淫らな水音が響くのに合わせ、清楚可憐なイメージから程遠い、野太い牝の嬌声が漏れ出てしまう。

（あの男に教えられた、下品で淫らな豚声出ちゃうっっっ！　ああっ、スイッチ入るっっ！　巧のでも入るなんてぇっ！　牝豚スイッチきちゃダメ……あぅうっっ！）

カメラの前で腰をズンズンっッッ！　と降ろすのに合わせて、肉棒の最も敏感なぷくりと膨れた雁首を、鍛えられたマン肉が、無意識にギギュゥウウッッ！と潰れんばかりにきつく食い締める。

瞬間、魔性の肉体改造によって、ほとんど剥き出しの快楽神経に、無数の官能花火が乱れ咲き、恋する少年に跨った麗しの姫騎士の顔が、抗い難い快楽の炎に、ネットリと炙られ、淫らに蕩け堕ちていく。

「おぉぉっっ、ダメぇっ。んひぃぃっ！　オマンコにチンポ……巧のなのに、カメラ撮られてるのに……っっ。はぁはぁっっ！　こんなぁあっっ！」

（激しくすると起きちゃうっ！　巧にバレたら、私どうすれば……ほぉぉおんっっ！）

心でどれだけ祈っても、アイラの腰の上下動が止まらない。それどころか、騎士として鍛えた強靭な下半身の媚肉を思い切り使って、まるで高速のスクワット運動のように、姫騎士の身体がグングンッッ！と縦に揺れ動く。

著者近刊
『キュアリープリンセス 正義の心を悪堕ち洗脳』『気高き妖狐は悦獄に堕つ』『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』
好評発売中！

卑猥改造制服からのぞく白い柔肌には、ネットリとした発情汗が、ふつふつと浮かび上がっており、灯りに照らされた美体を、淫猥に彩っている。
「ははっ、でけえケツ振りまくりやがって。騎士じゃなく、盛った牝豚そのままだなっ。親父にしっかりと仕込まれたなぁ。あの生意気な騎士様が、撮影されてるってのに、カレシのチンポで積極的にヨガってやがる」
「くっ、いわないで……っ。あぅっ、好きで感じてるわけじゃ……っ。身体が、もう快感に慣れすぎて……おひぃっ、媚薬出てるぅっ！　刻印が、ぉおっ！　おっ、おおっ、ぉおおっっ!!」
アイラが洋介を睨みつけようとすると、誰のペニスかなど関係なく反応する淫蟲が、子宮内でブチュブチュと媚毒は吐き出し、お腹に刻まれた発情呪淫が、カッカッと熱く発光する。
すると瞬時に女体がビクンッっ！　と大きくわななき、アイラの感度も天井知らずに急上昇させられる。
レンズに映る自分と目が合うと、それはとても快楽に抗う強く清い騎士などではなかった。
小寺親子が望んでいるような、牝奴隷には絶対に堕ちない――かろうじて残る強い意志の力で、ギリギリの理性は残っているものの、半笑いを浮かべながら、盛った牝獣のように、腰を振りたくる様を見て、淫欲の炎に、さらに油が注がれてしまう。
「巧、ごめんなさいいっ。私、チンポ入ると牝豚になっちゃうっ。そう仕込まれたのっ！　お金のために、いっぱい犯されて……ぐすっ、んんんっ。少しだけ我慢してっ。すぐ終わらせるからぁっ！」
悔しさと巧への申し訳なさから、うっすらと悲しみの滴が浮かんでしまう
しかしそんな愛情を裏切るように、アイラの腰は背徳の快感を求めて、さらに動きを速めていく。

一ヵ月前、湾岸倉庫で巧と別れてから、仁三はアイラに仕事を与えながら、その過程で、これまで以上に苛烈なシチュエーションや薬物、闇魔法を使ってまで、気丈な騎士会長を、一匹の完全なる牝豚へと調教していったのだ。
「親父の本気はすげぇを通り越して、ヤバいからな。むしろ、よくここまで理性を保っていられたもんだぜ。だがもう限界だろ？　おら、大好きなカレシの童貞チンポでイッちまえよっ！　たっぷり撮ってばら撒いてやるからよぉっ！」
グイッッ！　と洋介がカメラをアイラに近づけ、肉欲と愛情のギリギリの一線で、ビクビクと淫靡に震えている金髪の戦女神を撮影していく。
「い、いやぁっ。こないでっ。カメラ近づけないでぇっ！　見られるともっと感じる身体なのっ！　わかってるくせにっ！　許さな……あぉぉっ、ひんぐぅっ！　腰激しく……ああっ、止まって、もうオマンコ止めてぇぇっっ！」
「ははっ、こいつはAVだぜ？　騎士様が感じるっつんなら、もっとじっくり撮ってやるのが、優しさってもんだろうがっ！」
天才騎士と謳われた強気かつ高潔なアイラが、心の底から本気で懇願する様に、洋介はただならぬサディスティックな感情に晒されているのだろう。
金髪の少女の泣き言を笑って無視し、洋介のカメラが、うねる局部や、汗まみれのボディライン。そしてアイラが腰を動かすたびに、ブルンブルンッッ！　と大きく揺れる爆乳を、嬲るように撮影していく。
「おっ、おぉぉおっ！　ゾクゾクするぅっ！　私、こんなところ撮られて……巧のチンポ、あふっ、マンコでジュボジュボしちゃうぅっ！」
恥ずかしいのに、見られれば見られるほどに、性的興奮の度合いが高まってしまう。

背筋を鋭い快感の電流が駆け抜け続け、カメラの前で気丈に振る舞おうと思うのに、身体はブレーキをかけることなく、たっぷりと教え込まれた淫らな腰振りアクメへと進んでしまう。
（乳首ビンビンのおっぱいも、汗まみれの身体も、変態オマンコもみんな撮られてる……気持ちイイ、気持ちイイッッ！　抑えられないっ、オマンコ蕩けちゃうぅっ！）
気分が淫らな方向に振り切れていくのがわかる。
慣れ親しんだ学び舎の一室で、恋人のペニス相手にヨガる自分を、大勢の人々に見られるのだと思うと、それだけで甘く切ない雷撃が、脳内を何度も何度も駆け巡る。
牝の発情快楽で極限まで熱せられた、淫らな光の刃によって、理性がバターのように、ドロドロと蕩けさせられていく。
「くくっ、もう一度聞くぜ、アイラ。初めて咥える……いいや、逆レイプしてるカレシのチンポの味は、どんな感じだぁ？」
いやらしい洋介の質問が、火照る身体を、さらなる淫獄火炎へと突き落とす。言ってはダメだと、思いやりあるアイラの本心が傷つけば傷つくほどに、苛烈な調教によって目覚めさせられたマゾの欲望が、ズズッッ！　と鎌首をもたげてくる。
「……き、気持ちイイ、ですっ」
「豚がっ、小さすぎて音声拾えねぇだろっ！　もっとデカい声で、なんならカレシが起きるくらいの勢いで、カメラに宣言しちまいなっっ、このビッチ騎士がよぉっ！」
洋介の卑劣な誘導尋問に、アイラの心に張り巡らされた被虐快感回路が、無理やり全面開通させられていく。堰を切ったかのように駆け巡るマゾ豚快感が、アイラに裏切りの快楽を燃え上がらせる。
「気持ちイイですっっっっ！　おぉおっ、カレシの

ハカセっ
大丈夫!?
これは…っ!?

そ奴がなかなか
手を離さぬのでな
宝珠ごと取り込んで
やったのだ

ミ…コト…
サンジュエル…
を…っ

!!

ここねっ！

ん…っ！

ガキめ
正気に…！

テケリ・リ チェンジ!!

ミュルルルッッッ

ジュルルル

ミコト変身しての最終決戦(ラストバトル)!!

狂い咲く桜花クトゥピンク!!

深淵戦隊(しんえんせんたい)クトゥルージャ

～銀河(ぎんが)爆(は)ぜる!! 胸臆(きょうおく)に秘(ひ)めた桜花(おうか)～

最後までたっぷりクリ責め♪

漫画(COMIC)／からすま弐式(にしき)

くっ…マスクが…！

ショゴゴのダメージが激しいわ…っ

…無駄な足掻きを…

くっっ！んうううっ！

待っててハカセ！今助けるわっ！

すぐ再生して…っ全然減ってかない…！

なら…っ！

ツール・オブ・クトゥルプス!!

ミコトっ後ろっ!!

はっ!!

っくぁ…あ!!

完全顕現には至らなかったがある程度力は取り戻せたようでな

ああぁぁぁぁっ!!

ダガーが…壊…れ…っ!

礼に人間の貴様には…

我が雷(いかずち)一番に味わう名誉をやろう

きゃっ!!

さぁどこに欲しい？
乳房か…乳首か…？
尻たぶか…？
やめなさいっ
放…してっ
やぁあっ!?
いや…嘗て我が奴僕にこんなところを苛まれて悦んでいたなぁ？
ここにしてやろう
はうっ!!
陰核脚！
あれ…見られて…っ!?
ゆくぞぉ…？
ひ…！
や…やだ…っ
やめ……っ！

Labyrinth in the Excalibur
迷宮の聖剣
魔物姦に狂い堕ちる王族母娘
小説/NOVEL 木森山水道
挿絵/ILLUSTRATION りょう@涼
聖剣を求め迷宮へ足を踏み入れ姫騎士は、
その最深部で淫辱なる真実に直面する！
ご案内
この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられていますので、
シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

シーン1

三日月が静かに輝く深夜。

エーライ王国の王女、フェレナ・エロアナは、実母にして女王である、ヴェルティーヌ・エロアナに密かに呼び出されていた。

「わたしが【聖剣スケベミルフ】を!?」

ほかに誰もいない謁見の間で、王女フェレナが驚愕した。

年の頃はハタチほどだが、十代半ばの乙女にも見られる姫は、瞠目しつつも従容と跪いている。

純白のインナーとスカートを身につけ、身頃の開いた紅のマントを羽織り、その上に王族の軽装鎧を纏うという正装だった。

凜然と整った顔立ちでありながら、胸もお尻もたわわに実る美姫の姿は、国の内外で一目千金と謳われている。

抜群の容姿だけでなく、国民思いの真面目な性格も、若くして誰よりも剣術が達者なところも国民に慕われており、見目麗しい王女は親しみを込めて[白き剣姫]と呼ばれていた。

「そうですわ。ほかでもないあなたに【聖剣スケベミルフ】を託したいのです」

玉座の女王が厳かに言う。

フェレナを産んだ母であり、夫の死後より国を治めるヴェルティーヌもまた、絶世の美女であった。

三十九歳という年齢や、フェレナも含めて十人の男女を儲けたことを感じさせないほど若々しい。

娘と並ぶと姉にしか見えないくらいだ。

城内に飾られた二十年前、つまり、今のフェレナと大差ない年頃に描かれた肖像は、娘と瓜二つでやはり美しい。

もっとも今では、長年かけて熟成された匂い立つ色香を纏っている。

お腹と胸元が大胆に空いた水色のドレスのカップは、大人の顔よりも大きい雪色の乳房を収めており、玉座にゆったり置かれた柔尻も、負けないくらいのボリュームだった。

股の間に向かって切れ上がるスカートから覗く太ももも、ドレスが浮かせる胴体も、熟女の色気を倍増させる絶妙な肉付きを誇っているが、ウエストは若い娘のように細い。

娘に勝るとも劣らない美貌は大勢の語り草で、[平和の女神]とさえいわれる。

「わたしに聖剣の使い手になれとっ」

「はい。あなたが聖剣の新たな使い手となり、魔王を倒すのです」

「ッ……!」

姫は嬉しすぎて目が眩んだ。

魔王とは、大陸の東で生まれた強力な魔物だった。卓越した力で多くの国を征服した魔の覇王は、エーライ王国に迫りつつある。

そして【聖剣スケベミルフ】とは、天を裂き、地を割る究極の剣だ。

何を隠そう、ヴェルティーヌは先代の使い手だった。

二十年前に起きた深刻な事変の際、徳が高く剣術が達人級だった彼女は、平和と戦争の神《ビッグ・ジャスティス》より【聖剣スケベミルフ】を賜り、夥しい魔物の軍団を打ち倒し、平和をもたらしたのだった。

(誰もが欲する栄光の剣を、誰もが憧れる先代の使い手より託され、平和のために強大な悪を討つ。こんな至福がほかにあるか!)

ドタッ!

喜びのあまり王女が卒倒した。

「フェレナ!」

豊胸を揺らして女王が駆け寄る。

「しっかりなさい! あぁ、きっと具合が悪かったのですね。娘の不調を見抜けぬなど、母親失格ですわ……!」

「ママ……?」

気がついて呟くフェレナ。

今の女王は君主でなく、母親の顔をしていた。

それに気づいた王女も、姫ではなくひとりの娘になり、母の顔をじっと見る。

「ごめん、体調不良じゃないわ。ママの言葉が嬉しすぎて気絶したのよ」

「そうですの? よかったですわぁ」

女王はほっとした顔をする。

「じゃ、早速だけど、聖剣をくれる?」

娘が言うと、母はかぶりを振った。

「これはあなたにも教えていない、王家の最大の秘密なのですけれど……聖剣は城の地下迷宮の奥ですの」

「あ、ほんと。地下迷宮なんて初耳よ」

「しかも迷宮には、魔物が跋扈(ばっこ)しておりますの」

「物騒なのねー」

「大きすぎる力は、平和と幸せだけでなく戦乱と不幸も生み出し得るもの……故にそうして守っているのですわ」

「なら、迷宮の入り口へ案内して。準備をしたらすぐ行くわ」

「迷宮攻略に必要な物は既に準備済みです。道すがらお渡ししますわ」

「さすがママ。じゃぁ、今から行くね」

「あなただけに危険を負わせません。迷宮にはわたくしも参ります。若い頃のように剣は振るえませんけれど、魔法でサポートいたしますわ」

「えー! それは嬉しいけど……」

王女は迷う。

危険な行程の連れとはいえ、生きる伝説の英雄であり、大好きな母親と旅ができるのは嬉しい。

しかし、おそらくは不在でも国が動くように根回しは済んでいるのだろうが、魔王の脅威がある今、玉座に君主がいないのには不安を覚える。

(悩ましいわねー)

◆女王と共に行く↓ シーン2 80ページへ
◆同伴を断る↓ シーン3 81ページへ

シーン2

石の地下迷宮に、穏やかで凛とした声が響き渡る。
「この世にあらざる魂よ、あるべき世界へお戻りなさい……ミルフレイド！」
唱えた女王の身体から、目映い光芒が解放される。
家屋ほどもあるケルベロスの胸元に着弾すると、魔獣の巨躯が霧散した。
「すごい……これが英雄女王ヴェルティーヌ様の力かっ」
フェレナはすっかり興奮していた。
ケルベロスといえば、上級モンスター。単独で倒せる者でさえそうそういないというのに、女王はものの数秒で片づけてしまった。
（やはり一緒に来ていただいてよかった……こんなに嬉しいことはないぞ）
国の長であり自分を産んでくれた母は、小さい頃から背中を追ってきた伝説の英雄。
肩を並べて戦えたなら、これ以上の喜びはない。
だから、私情を優先させて同伴を頼んだのだが、実際に力を見た今、自分の選択は正しかったと心底思う。
「実の娘に褒められるなど、くすぐったいですわね。けれど、悪い気はしませんわ。わたくしの自慢の娘ですもの」
「自慢の娘ですかっ」
「えぇ。強く優しく美しい、自慢の娘ですわ」
フェレナは目が眩んだ。
（敬愛する女性から、このような賛辞いただけるなど光栄すぎるぞっ！）
「玉座でも告げましたが【聖剣スケベミルフ】を安心して任せられますわ」
「二回もそのようなことを言ってくださるのですかっ」
「はい。大切なことですから、二回言いますわ」
「ああっ……ヴェルティーヌ様ッ」
フェレナは嬉しさのあまり、仰向けに倒れ込んだ。
（もう死んでもいい……いや、死んではいけない。必ずや女王陛下のご期待に応え、聖剣を手にし、魔王を討ち取ってみせる……その後は、ずっとこの方と共に、民と平和のために生きるのだ。これまでのように）
慌てて抱き起こしてくれる女王の温もりで、さらに胸を熱くしながら、フェレナは決意を新たにした。

ようやく辿り着いた聖剣の安置場所は、城の貴賓室のように豪奢だった。
「よぉ、ヴェルティーヌ。久しぶりだな。しかしお前、むしゃぶりつきたくなる熟女になったよなァ」
下品に話しかけてきたのは、ソファーでワイングラスを傾けていたミノタウロスだった。
「何故ここに魔物が！」
フェレナは剣を抜く。
「そっちの娘のほうはフェレナって言ったか。若い頃のお前にそっくりだな。なんとも食いでのある王女様だぜ」
魔物は意に介さずに言ってくる。
「汚らしい魔物がっ。自分がどなたに話しかけているかわかっているのか！」
斬りかかろうとしたとき、女王が止めた。
「よいのです、フェレナ」
「何故です、陛下っ」
「この方は《ビッグ・ジャスティス》様ですわ」
「なんですって⁉」
「聖剣を授けてくださる偉大な魔物様です。それは、女を孕ませることでなされますの」
女王は恍惚とした顔をしていた。
「陛下……」
王女は瞠目する。
愛し敬う女王の信じられない言葉もそうだが、ここまでうっとりした顔など見たことがない。
（わたしを自慢の娘と言ってくれたときよりも、ずっと親愛の念が見える）
穢らわしい牛魔に敗北感を、女王に違和感を覚えていると、魔物が言う。
「この国の始祖が魔法実験で偶然オレを生み出したのだ。以降、ここに飼われ、生け贄の女がやってきたときには、聖剣を孕ませてきた」
「そんな話、聞いたことがないっ」
思わず声を上げた直後、さらに信じられないことを告げられた。
「ヴェルティーヌも二十年前、オレの種を仕込まれて聖剣を産んだ」
「っ……！」
フェレナは誰よりも敬愛する女性を見る。
彼女は頬を染め、まるで恋人を見るように魔物へ熱い視線を送っている。
魔物の話は真実なのだ。
「こんな馬鹿なことがあるか！」
実は、聖剣は汚らしい方法で産む物であり、乙女より無垢だと思っていた女王は、その経験者だった。
魔物を見る目を見れば、仕方なく取り組んだのでないことはわかる。
女王は悦んで魔物に抱かれ、今も爛れた情念を抱いているのだ。
「フェレナ……さぞ驚いたでしょうけれど、聖剣が必要な状況は変わっておりませんわ」
頬を染めたままの女王は、
「わたくしが産んだ聖剣は、二十年前の事変で力を使い果たして消えてしまいましたの。だからあなたが」
女神のように微笑みながら、おぞましいことを口にした。
「《ビッグ・ジャスティス》様に種付けしていただき、聖剣を産むのです」

◆女王を赦して承諾↓　シーン4　89ページへ
◆怒って女王を斬る↓　シーン5　96ページへ

シーン3

地上の雨期のように湿って埃っぽいその地下迷宮は、月みたいにぼんやり光る石のブロックでできていた。

大人数人がかりでようやく運べそうな直方体で、上下左右を囲まれた巨大な通路。それが延々と続いている。

「ハアァァァ！」

ザシュッッッ！

フェレナは向かってきたゴブリンを、一刀のもとに切り伏せた。

ぼろぼろの布の服の腹を斜めに断たれた身体が、ドス黒い血をしぶかせながらずり落ちていく。

絶命した魔物の身体は、ほどなく霧となって消えた。

魔導の通説によれば、異界の住人である魔物の身体は、この世界では仮のものでしかないらしい。故に屍は残らず、肉体は雲散霧消するのだという。

「次から次に雲霞の如く。ここは迷宮、密室だ。どこから湧いてくるのだ？」

姫は母とふたりきりでいるときのようにではなく、［白き剣姫］の凛々しい口調で吐き捨てる。

「迷宮も魔物も聖剣守護のため。今も王家が召喚し、放っているのやもな」

女王の申し出を断り、単身で迷宮に挑んでから、どれくらい経ったろう。

渡された地図を頼りに、聖剣の安置場所へ最短ルートで進んでいると、暗がりから魔物が飛び出してくる。

ゴブリン、オーク、オーガなどの下級モンスターから、グリフォン、デーモンなどの上級モンスターまで、ピンからキリまでいる。

「まだ道程の半分にも満たないというのに、先が思いやられるな」

剣を収めて歩きだす。

「しかし、魔物などには絶対に負けん。必ず聖剣を持ち帰る。陛下の期待にお応えし、共に魔王を滅すのだ」

向こうの暗がりから、どう猛な唸り声が聞こえてきた。

目をこらすと、犬の首を三つ生やした魔獣が仁王立ちしている。青い身体は家屋も優に超えるほど巨大だ。

「上級モンスターのケルベロスかっ」

収めたばかりの剣を抜き、鎧を軋ませながら突進する。

「二十年前、陛下はこの修羅場を制覇し、聖剣を手にした。だからこそ、困難に出会うほどに、同じ道を歩む喜びが大きくなる。敬愛が強くなるっ」

間合いに入るや、勢いよく噛みついてきた首のひとつを横に跳んでかわし、半回転して斬り落とす。

残りの首が悲鳴混じりに吠える中、

「そう、敬愛だ！　わたしは強く優しく美しい女王陛下を敬愛しているっ。あの方を鑑に今の自分になったのだ。貴様などにこの道を阻めるものか！」

叫んだフェレナは、怒りと憎悪を込めて踏みつけてきた毛深い足を踝の辺りで両断。消えかけていた頭を踏み台にして、健在の首に斬りかかった。

フェレナは、とうとう目的の場所に辿り着いた。しかし。

「よぉ、ご苦労だったな」

聖剣があるはずの部屋の鉄扉を潜ると、ソファーでワイングラスを傾けていた魔物が言ってきた。

信じがたいことに、石造りの迷宮の最深部は、城の部屋のように豪奢だった。並ぶ家具は一流品ばかり。王家が厳重に保管しているはずの最上級の絵画まで何枚も飾られている。

「なんだ貴様は⁉　わたしが求める物はどこにあるのだっ」

「オレはただの《ビッグ・ジャスティス》さ。お前の求める【聖剣スケベミルフ】は、今ここにはない」

ワイングラスをテーブルに置いた魔物が、悠然と立ち上がる。

相手はミノタウロスだ。

ただし、牛の顔は内面の凶暴さがにじみ出ていて、これまで相手にしてきたどの魔物よりも凄みがある。

見事に割れた腹筋や、太い血管を浮かせるはち切れんばかりの四肢。

まるで洗濯したばかりの純白の腰布を着ける身体も、息が詰まるほど威圧的だった。

「魔物風情が愚弄するか！」

「そういきり立つな、［白き剣姫］フェレナ。これから教えてやるよ。お前の大好きなヴェルティーヌママが黙ってた、汚らしい事実をよ」

「なんだと？」

どういうわけか、魔物は自分の事情も素性も知っているらしい。

警戒を解かずに耳を傾けていると、魔物は信じがたいことを言った。

「まず、聖剣は女が産卵するものだ。このオレ《ビッグ・ジャスティス》に種付けされて産み落とすまで、聖剣を欲する気持ちを失わなければ、ひりだした卵の中身は聖剣だ」

「……まさか⁉」

「たとえば、魔物と人間の間にガキができれば、そいつはハーフだ。聖剣も同じでな。剣は物だが、産んだ女が人間なら、本質は人間と魔物のハーフ。だから、力を使い果たせば消える。お前が散々倒してきた魔物のように」

「ッ……その言い草はもしやっ」

「そう。聖剣が安置されてるなんて嘘っぱちだ。ヴェルティーヌがオレと儲けた聖剣は、二十年前の事変のあと、力を失い消えている」

「ああ……嘘だっ……嘘だぁっ」

フェレナは頭をかきむしった。

「お前の大好きなママこと、英雄女王のヴェルティーヌは、魔物であるこのオレ《ビッグ・ジャスティス》と交尾して、聖剣を産卵したのさ」

下卑た笑みを浮かべた魔物は、

「ママの抱き心地は最高だったぜェ？　オレはこの国の始祖に生み出され、以後、聖剣の種馬ならぬ種牛として丁重に飼われてるんだが、アイツは歴代最高だ。あれほど交尾し甲斐のある女はほかにいねぇ。もっとも、記録は塗り替えられるかもな。娘によってなァ」

著者近刊　『純真戦士キューティウィンド 触手の魔悦に魅入られて』『見習いショタ騎士のハーレム学園性活』『子作り教室 ライバルお嬢さまの幸せ計画』『解放姫アンナマリー 若き王子が仕掛ける牝妻開発』
好評発売中！

「な……なにをっ……」
「もう、わかってるんだろ？」
黒ずんだ魔物の舌が、唇を舐める。
「ヴェルティーヌはお前を後継者に指名した。お前は気絶するほど喜んで受けた。なら、新しい聖剣の母体だな」
「うぅ……」
「アイツはお前に、オレと子作り交尾してこいと、そう命じたんだよォ！」
耳をつんざく銅鑼声に、姫が倒れる。
「こんな……こんなことがっ……」
「見るがいい。これが証拠だ」
這いつくばる王女に向かって、魔物が顎をしゃくる。
「そいつは、古今東西の出来事を映す魔法の道具。お前とアイツの最後の夜は視聴済みだ。けど、もっと面白いもんを見せてやるよ」
示された部屋の奥には、広い室内の五分の一を占める巨大水晶球がある。
その内部に、映像が浮かぶ。
『アアッ、産まれますわッ！』
青から透明に変わった水晶球の中央に映るのは、この部屋だった。
室内の真ん中、シャンデリアによって真昼みたいに照らされるベッドで、女とミノタウロスが交わっている。
魔物の姿形は、目の前の物と変わらない。一方の女に、王女が目を剥く。
「これはわたしではないかっ⁉」
毎朝、侍女と共に身支度をしながら鏡で見ている自分と瓜二つなのだ。
『《ビッグ・ジャスティス》様に孕ませてもらったスケベミルフ産んじゃいますのォ！』
自分としか思えない女は、声だけでなく身に着ける物も同じだった。
エーライ王国の王族の鎧だ。
もっとも、着けているのは両手両足のみ。胴体は丸裸で、メロンのように熟れた乳房も、逆ハート型に引き締まったお尻も丸出しだった。
しかも、お腹は臨月のそれだ。
膝立ちの女と同じく、自分も膝立ちで後ろから犯している魔物が力強く腰を振る度に、卑猥な水音が木霊して、恥ずかしい汁が飛び散り、妊娠線が浮くお腹が小さく震えている。
『どうだかな。また、オレたちのガキで、未来の迷宮の守り手なんじゃねぇのか？　英雄候補の女傑さんよォ』
映像の魔物が野卑に言うと、女は髪を振り乱す。
『違いますのッ！　今度こそ【聖剣スケベミルフ】ですわァ！　でないと、国が、民がァ！』
魔物と一緒に腰を振り、たわわな乳房を根元から弾ませながら女が叫ぶ。
『ここは外よりも時間の経過がのろい。もう少しくらい、オレと愛し合っていても不都合はないぜ？』
『アアア！　いやぁッ、わたくしを惑わせないでくださいましぃ……』
女はだくだく涙を流す。
『《大正義》様の魔物おペニスで貫かれながら言われたらァ、ヴェルティーヌ、まだいたくなっちゃいますわァ！　まだまだこの爛れた至福を貪りたくなりますのォ！』
『聖剣を産んだら、ここは用済み。おさらばするしかねぇ。二度と、オレとの交尾を楽しめなくなるんだぜ？』
『アア～ッ！　アアア！　いやいやいやいやァ、わたくしの心を揺さぶらないで、ンムゥ……ンムムム！』
いやいやと首を振る女の口を、魔物の口がふさいだ。
汚らしい魔物に口を犯されているというのに、すぐに女はうっとりと目を細め、接吻を受け入れた。
半裸鎧の妊婦は一緒に腰を振り合うと同時に、唇同士をグイグイ押しつけ合うディープキスをし続ける。
「ヴェルティーヌ……か」
王女が呟く。
映像の中の女は、若き日の女王に違いない。見せられているものは、二十年前にここで起きた出来事なのだ。
「この魔物の言うことは真実なのだ」
信じたくないが、認めざるを得ない。
ショックで心が崩れ落ちそうになるのをなんとか堪えながら、フェレナはベッドに上がる。
「さぁ、やれ。わたしは逃げも隠れもしない。貴様の種で孕んでやるっ」
鎧の身体でベッドを軋ませながら、大の字に寝転んで魔物を睨む。
「そんなにオレにヤられたいか」
「馬鹿がっ。王女の使命は人々の平和を守ること。故に、聖剣は持ち帰らねばならない。たとえ、汚らしい魔物に穢されることになろうともだ……！」
「王女の鑑だなァ、お前も」
ミノタウロスもベッドに上がった。
「聖剣への生け贄は、お前みたいに心も清い美女ばかりだった。そんな聖女の心身を隅々まで犯すのが大好きでな。だから、大人しく飼われてる」
王女の目算で二メートルを超える巨躯だけに、体重も相当だ。ベッドは浅くめり込み、スプリングの悲鳴じみた軋みは彼女が寝転んだ際の倍はある。
王女の瑞々しい太ももの裏に、人間のように五本の指が生えた手のひらを滑らせ、そのまま引き上げた。
「なんだと⁉」
膝立ちの魔物は、王女のウエストを垂直に浮かせ、両足を宙に漂わせる。
マントもスカートも天地がひっくり返ったように完全にからげてしまう。
「き、貴様！　なにをしているのだ！」
「まんぐり返しさ。じゃじゃ馬王女様にはぴったりの体位だろう？」
「どこがだ！」
猛烈な羞恥と屈辱で真っ赤になりながら王女が怒鳴る。
太ももはほぼ百八十度に広がり、動きやすい純白ショーツで秘めた女の芯が、魔物の眼前に露出していた。
鎧の足で宙を掻かされているのは心底情けない。
「すぐに戻せ、この畜生風情がッ！」
「恥ずかしくて悔しいからか？」
「当たり前だっ、貴様が平和のために必要でない魔物なら、首を刎ねているところだぞ！」

「迷宮の奴らみてぇにか」
魔物は恐れるどころか嘲笑した。
「奴らと違い、オレはお前にとって必要な魔物だからなァ。だから、こんなことをしても絶対に殺されねぇ」
ビリィッッッ！
あろうことか、ショーツを力ずくでむしり、女の芯を裸に剥いてしまった。
「事情につけ込んで聖女サマに暴虐を働くのも、飽きのこねぇ娯楽だぜェ」
「なっ⁉　あっ……アアア～～～！」
王女は籠手と一体の指ぬきグローブの手のひらで頬を挟み、悲鳴を上げる。
「雪のように白く綺麗で蒸れてるマンコだな。さすがは［白き剣姫］サマだ」
花のつぼみのようにふっくらした肉土手をひとしきり視姦した魔物は、
「ツンとくる汗の匂いも、汗で宝石みてぇに照り光る様子も、最高だな」
誰も触れたことのない、国で最も貴重な王女の陰唇に牛の鼻をつけ、何度も何度も深呼吸し、
「ああッ！　やめろ貴様ッ、自分のしていることがわかっているのかぁ」
馬耳東風で陰唇のワレメに鼻をグイグイ押しつけて胸一杯匂いを嗅ぐ。
「くぅぅッ、今すぐ離せっ！」
いやいやと首を振りながら、鎧の足でじたばた宙を掻く。
王族として真摯に生きてきた王女にとって、それは異常すぎる行為だった。
「どぅれ、味のほうはっ、と」
「あ、味だとっ？　まさか貴様……！」
ぎくりとした王女が自分の股間を見ると、魔物が顔を離していた。
「そのまさかさ」
幅が広くて分厚い、牛みたいな舌を長く伸ばし、ニタリと笑う。
「馬鹿な……今度は舐める気かッ⁉」
それしか考えられない。
「冗談ではないぞ……このぉッ！」
誰にも触れさせたことのない大事な部分を、魔物などに舐められるわけにはいかない。
子作りそのものの聖剣作りに肝要ならばまだしも、秘所を舐める必要などどこにもない。
そんなおぞましいことは嫌すぎる。
王女は逆立ち状態の鎧の足を力一杯バタつかせ、逃れるために頑張った。
「逃がすかよ。舐めまくってやる」
魔物はまるで馬の手綱を握るかのように、宙の足首をガッシリ掴み、密着させた口元で陰唇を押さえつける。
筋骨隆々すぎるミノタウロスは、ただそれだけで、百戦錬磨の王女を完全に押さえこむ。
「不必要にわたしを辱めるな！　子作りさせてやると言っているのだ、さっさとセックスすればいいだろう！」
「お前は、ただでさえ最高なうえに、今では至上の女王になってる昔たっぷり交尾した女の娘ってプレミアがついてる。そんな奴のオマンコを自由にできるってのに、倦怠期の夫婦の義務交尾みたいなことするもんかよ」
魔物は黒ずんだ舌で、王女の白く清冽な陰裂を割った。
「アア～～～！」
断末魔めいた叫びを上げる王女。
じたばた抵抗させていた足が、天井に向かってピンと突っ張る。
「あああっ……ぬ、抜けェ！」
プリプリした分厚い舌が、大陰唇を内側に巻き込み、無垢なピンク色の小陰唇をめくり返しつつ、奥へ来る。
「熱くてヌルヌルした魔物の舌がわたしの中に……ッ」
逆さのスカートとマントがなびくほど、何度も腰を揺する。
そうして追い出そうとしたが、魔物はビクともしない。おぞましい舌は、女の中心へと深く食い込んでくる。
「ぐへへ、汗とチーズみたいな匂いがフレッシュな、瑞々しいオマンコだぜ。鍛えすぎてるから締まりは最高だし、使ってないお陰で色もすげぇ綺麗だ」
舌を入れながら器用に喋る魔物が嘆息する。
「こんな上質のオマンコは滅多にねぇぞ。ウシシ、ママ女王のもコレくらいよかったっけなァ、え、王女様よォ」
魔物が舌をそよがせる。
「うあああッ！」
「処女膜を舐められて感じたか？」
「はあ、はあ、処女膜だとっ」
「ああ、処女膜だ。真面目な王女様のは、オーソドックスなタイプだな。壁に穴がいくつか開いてるやつだ」
まるで皿のミルクを舐める猫みたいに、舌先で処女膜全体を隈なくベロベロ舐めてくる。
「ママ女王の処女膜は、真ん中に大きめの穴が空いてるタイプだったぜ？」
「はあ、はあ、いちいち陛下のことを持ち出すなっ、わたしは聞きたくないぞ……ひぃぃっ！」
息を乱しながら抗議すると、処女膜を奥へ押し込まれた。
「破られると思ったか？　するかよ、もったいねぇ。折角の娘マンコだ。まだまだ楽しませてもらうぞ」
「ああッ、やめろっ、舐めるなァ」
嫌悪感と汚辱感で、鎧を纏う全身を震えさせてしまう王女。
豊富な唾液でヌルつく舌の感触は、肉体的には決して不快ではないのだが、魔物にされているという意識が、おぞましく感じさせる。
「お前の大好きなママ女王も、初めはそんな感じだったなァ。いや、もっと抵抗したかな。もっとも、こうすると大人しくなったがなッ」
魔物は顔を離して一気に舌を抜く。
自分の唾液か、王女の愛液か。
汁でべちょべちょになった口元を舌なめずりで拭うや、股間に勢いよくかぶりつく。
「アア～～～～！」
人間の数倍は分厚い魔物の唇が、しっとり濡れて輝きを増した白磁の陰部と密着した。
右へ左へ素早く首を振りつつ、先ほどまで舌を入れていた膣の中に、ドス黒い肉を再び埋め込み、泳がせる。
「ひぃぃッ、ひぃぃ～～～！　魔物の

アハハハッ！また山一つ消し飛んだわね！
ボワッ
ごごご
圧倒的じゃないの！私の魔法は！
思い切って異世界に来て正解だったわね
…まぁ 私自身の力だけじゃないのは癪だけど
でもこの秘宝ほんと凄いわ持ち出してきて正解！
くり
くり
実に清々するわ
父上も母上も私が家出しても一人では何もできないと思っていたのでしょうけど
彼らも同じ人なのだぞ
イルマ反省なさい！
バカ！
ダッ
あんな臭くて汚いのが同じわけないでしょ！
あなた自身では何もできないのに…
秘宝の助けがあれば異界へのゲートを開くくらい楽勝よ！
んあれはモンスターの集落かしら？
もっといい憂さ晴らしができそうね♥
いち早く犯したい腹パン系女剣士が登場！
異種流離奴隷
イルマ＝ディクサーンスの場合
漫画／野晒惺

こんなキモイ連中ですら親子仲良く暮らしているっていうのに…

ジュン ジュン ジュン

フン!

あの程度じゃ憂さ晴らしにもならないわね

ニヤリ

だったら…

さぁ! 逃げ惑いなさい!

パァァッ

カッ

もっと忙しく! 不様に!

ジュッ

うふふ… あっという間に静かになったわ♥

ということで

シーン

ここもおしまい

くわんっ

くわんっ

くわんっ

アハハッ! コレよコレ!

ゴゴゴゴッ

ズゴゴゴッ

こんな綺麗な光景を独占できるなんて最高ね!

父上も母上も見たことないはず！真面目クズの二人にはね！
イルマの育て方を間違ってしまったな
このままでは代々宰相や宮廷魔術師を輩出してきた我がディクサーンス家の名を汚しかねん
あの子は人の心がわからないのです
では辺境の教会にでも預けて…
フン!!
ハッ
スーッ
何が心がわからないよ！
ドッ
わかってないのは二人じゃない！

秘宝があるから私が負けるわけなかったのに…

ギリッ
ギリッ
キワ〜

あの程度の魔法行使で魔力切れするなんて ショボイ 秘宝だったのね

離しなさい！

ビクッ
ビクッ
ウガッ

臭い！気持ち悪いのよ！

それに再チャージされるまで元世界への帰還すらできないなんて…

ニュルッ
ヌルルッ
ウネ
ウネ
ぐるる

ぐぐ
ぐるるる
ニュルル
キキ
キキ

まさか魔力チャージ式だったなんて…

ちょっ!? やめなさい！私のお気に入りの防具！

バキッ
バキッ
バキッ
ニュル〜

こ…殺されるの？私が？ 嘘でしょ…

まさか私を食べる気？ ひあぁっ!?

ニュル〜
ヌルッ
くね
くね

どこ触ってんのよ！あんたらモンスターには関係ない場所でしょ！

ぐぐっ
ぐるっ
くにっ
ぐにっ
ぐにっ
ツンツン

むくっ
ぐいっ
くにっ
んあぁっ
くにっ
気色悪いのよ！
ドキッ
やめて！ダメ！
父上以外の男に触られた！私…穢れてしまった!?
ニュルル～っ
むくっ
うガぁっ うっガガっ
すり
すり
ハム
ハム
ツン
ツン
入らないから！そこっ無理っ！
ニュ～ニュルル～ッ
にゅるっ
ぐにっ
ぐねっ
ぐねっ
ぐねっ
ぐねっ
ぐぐっ
ぐぐっ
ぐぐっ
ニュウ
ニュ
うガガっ
ニュ～っ

ミチッ
ぐひっ
ビクッ
ミチッ
あがっ
し死ぬっ
グゴゴ!!
ブルルッ
ガシッ
グニュ
グニュ
お尻壊れるっ！
ぐあぁっ
ギュッ
ギュッ
グルル!
グロッ!!
ブクッ
こ殺されるの!?
ニュルンッ
ぐにっ
ぐにっ
プシャァァァッ
いやぁ!!
こんな所で
死にたくない！
誰か助けてぇ！
ニュプッ
ギュプッ
ぐにっ
くねっ
くねっ
ヌプッ

あれ？
身体が二つに
裂けるくらい
苦しいのに……
でも耐えられてる？

ヲマヱ
ワルイヤツ

カンジテ
ヤガルニュ

ぐぐっ

え？

ヲレタチデ
ハラマセル

これって
秘宝の力？

ぐうううっ

い今ぁ…
孕ませるって…
言ったぁ？

ハァ

少しずつ
モンスターの言葉が
理解できてきた？

シャブレ！

怨霊退散!!

ふたご巫女 十六巻

秋の納涼運動会!!

★バトルアスリーテスたちによる華麗な競演!★

こんなところで!?

漫画COMIC／嘉納(かのう)あいら

夫のいる身でありながら、呪われた肉体の疼きを抑えられずに大臣に弄ばれる王妃は——

見られる羞恥が女を熱く焦がし暗い法悦へとなるのだな？
おうおう奉仕にも熱が入っておるわ
それでこそ淫乱王妃よ
どれそろそろ恵んでやろう
王妃たる者がなんとも淫らなことよのう
獣淫
漫画／ぱふぇ
わ…わたひは貴方の…物になった覚え…は…ない…わ
呪いの…せいよ
このように辱められて悦ぶなど…

ハハハハ
何を言うか
衆人環視の中
犯されるのが

ホレっ今も
このように
悦んでおる
ではないか

ンあ♡

一番燃えて
おったくせに

ち…が

うあっ♡

ふぁあ
あはぁ♡

ああぁ
ああぁッ♡

あの頃より
良い具合
じゃないか

はうっ
何っ!?

中で…ッ
な…にか

あの男たちに
随分開発された
みたいだな!

え!? 嘘!!
まさ…か
そんなっ

ひうッ♡
ぁあッは
ああぁぁ

だめぇっ
こすれっ
弱いトコ
全部…ぅ
ううう♡

な!? 誰だ 儂の体を 勝手に!?
乳はいささか 熟れすぎたな
今少し張り があった方が 好みだぞ
やああ♡ こ…の 触り方っ まさか!?
それに このペニ…ち ぽ♡
この形は人間の 物のわけがない♡
う…そ ですっ そんな わけ…
今は 大臣…と
だって… あの人は も…う…

これは一体どういうことなのです？

わたくしを捕らえるなど誰の命令かしら

お放し下さい無礼ですよ

大臣閣下のご命令です

力ずくでも従ってもらいますぞ

そう…ですか

お母様の恐れていたことがついに――

亡国の姫アンリエッタ
Henrietta the Ruined Princess
孕ませ出産の異種武闘大会
闘い敗れたお姫様が犯され
淫獄の闇へと堕ちる……
小説/NOVEL 千夜詠（せんやよみ）
挿絵/ILLUSTRATION 九反（くたん）

上空を砂塵が舞っているのか、太陽の光はぼんやりと、それでいて焼きつけるように肌に染み込んでくる。

じんわりと汗が滲み、緊張感にいつもの数倍は鼓動が早くなっている気がした。

コロシアムを埋め尽くした数万人の歓声も遠くに聞こえるほど集中は高まって、アンリエッタは真っ直ぐに相対した存在を見据える。

荒削りに掘りあげた彫刻のような逞しい筋肉を見せつける巨漢は、似つかわしい巨大なハンマーを大きく振りかぶりながら試合開始の合図と共に、こちらに向かって走り出した。

賭けのオッズは、二十倍の差がついて、殆どの者が巨漢の圧勝を予測している。

無理もないと誰もが思う。

何故なら、彼女は余りにも麗しい。とても血なまぐさい武闘大会に出場するとは思えぬ気品と優雅さが全身を包み込み、剣を握るよりも、ダンスを踊っていたほうがよほど人を魅了できるというものだ。

広いコロシアムの端まで芳しい香りが届きそうな煌めく背中にかかる金髪は、身分の高い者しかしない縦のロールで横髪を整えている。黒いインナースーツの上に白銀の鎧を纏い、刀身が鏡のように磨き上げられた長剣は、やはり高貴な者にしか持つことが許されぬ代物であろう。

どこぞの貴族のお嬢様が気紛れに出場したようにしか、映らなかったのかもしれない。

人類種とは思えぬ咆哮を上げながら、巨漢はアンリエッタの目の前まで迫り、ハンマーを振り下ろす。

その威圧感だけで並の人間ならば恐怖に動けず、そのまま潰されてしまう。

ああ、あんな美人が勿体ない。

聞こえもしないそんな囁きを嘲るように、アンリエッタの肢体は巨漢の脇を流れ、

スパ――右足の腱を切り割いた。

ハンマーは地を叩き、乾いた大地に罅が広がる。

直後、巨漢は苦悶を叫び、恨めしい瞳を背後に向けたが、

「お終いです」

鋭利な鋼が首筋の皮を切り、血が滲んでいく。ハンマーをかわしながらの一閃、その直後にはもう無駄な動きの一切もなく反転し、彼女は致命的な二撃目を繰り出していた。

一瞬にして詰まれたのだ。

負けを認める合図である両手を上げながら、巨漢は麗しい強者を見た。

その深い赤茶けた瞳には、何者かに向ける激しい憎悪と強い意志が込められている。

「アンタ、いったい、何者なんだ？」

「ただの、旅の冒険者です」

予想を遥かに覆す事態に、コロシアムの大観衆は興奮に沸いた。巨漢に賭け、大損した者でさえ。

＊

ソルアースという国が滅んだのは十数年も前のことか。

あの焼けつく炎の熱さをアンリエッタは、決して忘れはしない。

夜明けまであと少し、まだ星の瞬きが空に散りばめられている頃、幼い彼女は侍女に揺り起こされた。

いつもの優しい手触りではなく、その手からは焦りと恐れが濃厚に感じられた。

眠気眼のままに、言われるままに着替えたアンリエッタの幼い思考には、侍女が何を喋っているのかよく分からなかったが、何か恐ろしい者たちが攻め込んできたということは理解できた。

後で知ったことだが、彼らは用意周到に王都に荷物に紛れて入り込み、内と外から一気に奇襲をかけてきたのだ。

城の守りは脆かった。なにせ、奴らの進攻はまるで予想外で、それは彼らの国とソルアースの間にはまだ二つの国があったからだ。

侍女に手を引かれた先は、城の地下へと向かう通路。だが、そこに優しい母も、大好きな父もいない。

アンリエッタは侍女の手を振り解き、玉座の間に走った。

怖くて堪らなかったが、泣くのを必死で我慢しながら、ただ両親に抱き締めてもらいたくて走った。

しかし、幼い姫君の願いは叶わなかった。

分厚いカーテンが燃え盛る玉座の間では、鮮血に塗れた王が、お父様が倒れていた。

それが意味するものが何か、聡明な少女は理解できてしまった。

もう頭を撫でてはくれない愛しい存在のすぐ傍に、その異形はいた。

豚面の巨体。でっぷりと腹の出た醜い体型だが、四肢は丸太のように硬く強靭に見える。

そいつの持っていた曲刀から、ついたばかりの血が滴っていた。

刹那、アンリエッタの脳内は、とてつもない憎悪に埋め尽くされる。

――殺、殺、殺、殺……。

傍に落ちていた剣を握っていた。沸き上がる衝動に任せて、突進している。

異形は、驚愕にその濁った瞳を見開いた。余りにも速い。

直後、アンリエッタの剣は豚面の片目を切り裂いていた。

年端もいかぬ人間の子供が、不意を突いたとはいえ、歴戦の衛兵でさえまるで歯が立たなかった異形に傷をつけたのだ。

豚面は反射的に少女に拳を叩きつける。

床を跳ねて小さな身体がぐったりとしたまま落ち、動かなくなった。

とどめを刺そうと巨体を揺らして、そいつはアンリエッタに近づいた。

だがそこで奴は考える。

末恐ろしいガキだ。今、ここで殺しておくべきか？ いや、それよりも……。

「お待ちください、ピッグポール様。どうか、その子だけはお見逃しくださ

い。ど、どのような言いつけにも、従いますから」
　アンリエッタの霞んだ視界に彼女によく似た女性が入り込む。小さな手を伸ばし、一心に温もりと愛情を求める幼子。
「お……母様……」
　その手は届かない。
「ごめんなさい、ああ、愛しいアンリエッタ……、本当に……ごめんなさい」
　それが最後に聞いた母の声。絶望と悲しみに満ちながら、最愛の王女が救われた喜びだけで微笑んだ。
　幼い王女が横たわっているのを侍女と親衛騎士が見つけた時には、王妃は既に城を後にしていた。
　意識を失ったアンリエッタが目覚めると、侍女と親衛隊の騎士が囲んでいた。王都より離れ、国境沿いの民家の中のことだ。
　そして、アンリエッタは父を殺し、母を奪い去った異形の名を知る。
　奴らはオーク。最も憎むべきは、オークの国、アンダーポンドの王、ピッグポールであると。

＊

　大会の出場者は予想していたよりも遥かに多く、トーナメント形式では数日の日程が組まれていた。
　他国との国交のないアンダーポンドであったが、この期間は支配地以外からも大勢の旅客が集まり、街は祭りのような賑わいになる。
　大会三日目、アンリエッタは二回戦に望む。優勝すればどんな褒美も望むままとあって、東西から腕に覚えのある猛者が集まっていた。ゆえに一回戦を突破したというだけで強者であることは間違いない。
　アンリエッタは自身の強さを信じてはいたが、決して油断はしていない。対戦相手の一回戦での戦いも見てきている。
　だが、
　――おかしい……、相手がトーナメント表と違うわ。
　反対側のアーチから現れたのは、予定されたバイキングの戦士ではなく、濃緑の鱗の肌をした半魚人だった。ギョロリとした丸い瞳の亜人は三叉の矛を携えている。身につけているのは腰に巻いた布だけで、その合間からだらりと垂れ下がった獣の逸物のような、つまり生殖器が覗けているのだ。
　――うっ……、気持ち悪い。
　大会の運営委員から闘技場内に連絡が入る。
「えー、一回戦で勝ち上がったバイキングが事故による負傷の為、急遽、深淵の国からやってきた半魚人の戦士が参戦します」
　美少女とヌメヌメと濡れた肌をした半魚人の対戦に数万の大観衆が沸く。
「ちょ……」
　聞いていないわ――そう言いかけて、口を閉じた。半魚人族は水場や湿地なら厄介だが、乾燥した闘技場ならむしろバイキングの戦士よりも与しやすいだろう。
　気持ちを切り替え、闘技場の中央へと歩みかけたその時、
「騎士アンリエッタ、ちょっと待ちなさい。貴様の装備に規定違反の疑いがかけられている」
　戦いに集中しようとした矢先のことに、アンリエッタはむっとして振り返った。
　ローブを纏った人間の大会役員だ。
「どういうことです。一回戦では何も言われませんでしたし、武具に制限がある決まりなんて、聞いていません」
「いいから確認させなさい。文句を言うなら、失格にするぞ」
　明らかに理不尽であったが、アンリエッタはここで大会を去るわけにはいかなかった。
　――私は優勝しなくてはならないのに……、お母様。
　武闘大会には賭事もあって、利権が絡んでいるのだろう。こういった嫌がらせがあっても不思議ではない。
　――ふん、こんなことくらいでは、私は負けない。
　結局、防具ではブレストアーマーと腰ガードは規定違反の可能性が高いとされて外され、剣も運営側が用意した物を使うように指示されてしまう。渡された剣は歯こぼれして錆びついていた。
　――ま、まさか、こんな姿で戦うはめになるなんて。いえ、動揺してはいけないわ。
　腕と脚部に防具は残されたが、あとは黒のインナースーツのみ。それは動きやすいようにとピタリと肉体に張りついた物で、官能的なアンリエッタのボディラインを浮き上がらせていた。
　釣鐘状の形良く、たわわな胸の肉果実が歩みだした振動に合わせて大きく揺れる。インナースーツは下着代わりでもあって、後ろ姿では肉感的に隆起したお尻の谷間の陰影さえもくっきりと現れ、前方から見れば秘部の切れ込みすら浮き出ていそうだ。
　そんな美少女騎士の登場に、闘技場の歓声はどよめきの直後にこれまで以上に大きなものとなった。
「おお、凄いぞ、あの女騎士……、生唾物の身体じゃねえか」
「あんな格好で戦うのか？　へへ、乳首のポッチがたまんねえ」
　歓声に紛れているのに、何故かいやらしく肉体を査定してくるような声だけは、ハッキリと聞こえてしまう。
　途端に大観衆に見られていることを意識して肉体の芯から熱くなった。赤面しているとはっきり分かるほどに。
　――恥ずかしい？　いいえ、ここはもう戦場なのよ。
　対峙する半魚人。距離が近づくにつれ、そいつの垂れ下がっていた物が、太く長く硬くなりながら、むくむくと先端を持ち上げてきた。もう腰布は意味をなしていない。
「ヒッ……、何なの、それは……」
　やはりこれは羞恥だ。同時に死を与

えることも許された試合を前に、そのふざけた反応がアンリエッタには許せない。

開始の合図と共に、美少女騎士は一気に詰め寄り、一閃。

呆気なく終わったかと思われたが、

「そんな……」

半魚人の硬い鱗に傷はなく、反対にアンリエッタの持つ剣がまた歯こぼれしただけ。

「くっ……」

対戦相手の動きは鈍く、美少女騎士ばかりが一方的に攻撃を繰り出すものの、ガードに徹する半魚人にダメージはない。

渡された剣は刻むどころか鈍器としての役割も果たしてくれなかった。

アンリエッタの体力ばかりが削られた頃、

「そら、暑いだろ、こいつを浴びな」

バシャッ……。周りに集まった大会関係者らが、大量に液体をばらまきだした。

「な、何……これは……」

かなり粘質の液体だ。すぐには蒸発しそうにない。

——えっ、足が……滑る！

闘技場の地面が泥濘だして、それまでの動きができなくなったアンリエッタに対して、半魚人はまさに水を得た魚だった。

足の水掻きで濡れた地を自在に滑る対戦相手がアンリエッタに迫る。

繰り出された矛先を避けた途端、体勢を崩した騎士は無様に倒れ、慌てて立ち上がろうとしたその時、

「くっ、抜けない！」

両手が泥に浸かり、手首まで沈み込んだ状態から動かせない。

四つん這いの格好から膝を立て、足を踏ん張るのだが、それは卑猥に腰を上げていやらしくお尻を上下させているようで、観客の視線が集中してしまう。

「こ、このっ、抜けなさいってば」

ハッと気づく。

背後に半魚人が一撃を放てる位置まで接近していた。

——殺られる⁉

刹那の死の覚悟に全身から汗が吹き出し、インナースーツに濡れ染みが、脇に、放漫な乳房に、広がった。

だが、肉体に接触したのは、ヌメヌメした半魚人の両手だった。

突き出されたようなそそる肉づきのお尻が撫で回されている。

「ヒイ……ッ、な、何をして……、お、お止めなさい」

柔らかな張りのある尻肉が、捏ねられ、ゾゾッと背筋に悪寒が走る。

明らかに性的な悪戯で、しかし観衆は大喜びだ。

「こりゃ、良いものが見られるかもよ」

「ああ、これがなくっちゃ、アンダーポンドの武闘大会じゃねえな」

「いいぞ、もっとやれ！」

射抜くような睨みを送るが、半魚人はケケと笑うだけ。運営委員もニタニタと見ているだけで止めようとはしない。

「あ、貴方も戦士なら、こんな恥知らずなまね……、ひゃァ！」

ビリッと尻谷に沿って、インナーの生地が引き裂かれてしまう。

瞬間、アンリエッタの思考は羞恥に真っ白になった。

数万の大観衆が見ている前で、お尻が奥まで剥き出しにされてしまったのだ。

「……ッ！　い……イヤ——ッ！」

尻肉が掴まれ、ぐいっと房が左右に広げられる。桃色の蕾のようなアナルの皺孔が晒され、動き回って温まった粘膜の香りが立ち上った。

歓声に下卑た笑い声が混じり、恥辱に呻く。

「くっ、屈辱だわ。こ、このっ」

少しでも逃れようと腰を振るのだが、半魚人の爪はお尻の柔肉に食い込んで、意外な程の力強さに固定されてしまう。

涙目になりながらも、気丈に再び睨みつける。だが、瞳に映り込んだものに顔を引き攣らせた。

「や、やめてよ……、そんな物、ど、どうする、くひっ！」

半魚人の半分は人と同じ部位。牡の象徴たる先端が鰓の張った肉槍がアナルに押しつけられている。

——ま、まさか、挿れるの？

女性の恥部を前にした男性の衝動くらい知っている。しかし、そこは本来の生殖器官ではない。

大観衆の前で、人外にお尻を犯される。アンリエッタが戦いに身を置こうと決めた時に捨てたはずの乙女が軋み喘ぎ、全身に震えが生じた。

鱗肌と同じようにヌメヌメした液体に塗られた半魚人の肉槍が美少女騎士の肛門を抉じ開けてくる。

「くっ、うぅ……、や、破られるぅ」

ペニスの粘液に湿らされながら、窄ませていたアナルが強引に開かれ、

ズプ——ッ！　鋭角な肉槍の先端がとうとう潜り込んでしまった。

「うぐぅぅっ、や、やめろ、ヒイ！」

滑りに任せた突き込みが、重い衝撃となって直腸を押し広げ、腹の中に強烈な異物感が湧く。

——気持ち悪い。それに、こんな後ろを辱しめられているところ、み、見られて……。

肉槍の鰓張ったカリ首が腸壁を抉り、ヒリヒリとした痛みに染みる熱さが加わってきた。

「ケケ、ケケケ……」

半魚人はだらしなく裂けたような口を開き、涎をアンリエッタの背中に滴らせる。

「い、いつまで、こんなこと……、いい加減に……くっ、た、戦いなさいっ、いいッ！」

異形が腰を叩きつけだす。

ヌズっ、ズプッ、ズプッ……。その苛烈さにアンリエッタの背中が跳ねて、下向きに房つけた胸の巨果実がタプンと前後に飛び揺れた。

著者近刊 『言霊使いリザ 淫獄儀式の学園』『隷属ツンメイド 引っ越し祝いになってあげるんだからっ！』『俺の妹は中二病デレ 吸血姫な妹に吸い尽くされちゃう！』『お嬢様官能小説家 渡戸笑』 好評発売中！

「くあァァ……うっ、うっ、こいつ……私のお尻っ、卑猥に、使うなァァ、うう……」
衝撃に尻肉が揺れ、みっちりと肉槍をくわえ込んだ皺孔が捲れ上がる。
アナルを陵辱される様子が数万の人々に観賞されて、狂いだしそうに頭を振った。
「いいぞ、半魚人、もっと激しく姦ってやれ」
「泣き叫べ。それとも、もう感じてきたか」
目を覆う者もいなければ、同情すらない。初めから味方など期待してはいなかったが、同じ人類種の下衆な反応に悲しくなった。
なのに――。
「あっ、あっ、な、何……、お腹の中から……痺れて……」
腸内を掻き回される酷い痛みの中に、甘い悦の兆しが現れてしまう。
抜き差しで腸内の襞がカリ首に揺さぶられるたび、肉槍が引かれると同時に、内臓が持っていかれそうな感覚が湧く瞬間、ジーンと快感が響いてしまう。
「ん……っ！　あっ、あっ、そんなっ、ふわふわするぅ……」
突き込まれる衝撃のたびに、甘く呻く声が漏れていく。インナースーツの股座に濡れた染みが広がりだして、あれほどキツキツだったアナルが緩んできた。
――嘘、大観衆の前で、お尻をなぶられて、か、感じてる？
そんなはずはない――頭を振りながら、まだ試合が終わったわけではないと考え逆転の一手に思考を傾けようとする。
「クケェー、オレ……ダス」
アナルをほじくり返される感覚が一瞬止んだかと思うと、
ビュクン――肉槍が腸内を捏ね回すように暴れ、制御を失ったそれは跳ね上がり、
どびゅんっ、どくどくっ！
ドロドロとした大量の液体と、僅かに弾力のある球体が無数に注ぎ込まれてしまう。
「ヒ……っ、な、何か、入っ……、お、おおっ、気持ち悪いィィッ！」
食い縛る表情で涙ぐみ、必死でお尻を揺さぶり感触を振り払おうとするが、長い半魚人の肉槍が擦れるばかりで、惨めに身悶えるだけ。
捲れた皺孔からブシャっと精液を逆流させる様子に、多くの観衆が興奮を昂らせた。
「ハハ、ケツ穴がザーメン塗れだぜ」
「あーあ、可哀想に、産卵されたな、ありゃ」
半魚人の牡は牝との交尾で、初めに卵を頂く。その後、二度目の交尾で、精液を放ちながら卵を牝に戻すのだ。
こうして有精卵となったそれは、牝のお腹で成長し、やがて――。
繁殖行動の目的を果たした半魚人の肉槍が抜かれる。
ぽっかりと開いたままのアナルから、白濁水を滴らせながら、四つん這いの格好で美少女騎士は項垂れている。
もう精神的にも打ちひしがれているのだろうと誰もが思った。
だが、
「殺す、殺す、殺す、殺す……」
予想だにしなかった展開がコロシアムに起こる。
あれだけ抜くことのできなかった手首を泥濘から引き、残像を残すかというほどの速さで、アンリエッタはその場から移動していた。
魚眼をさらに大きく開いた半魚人が何か反応するよりも前に、アンリエッタの攻撃がそいつの胸部を貫いている。
対戦相手が置いたままだった三叉の矛を拾った美少女騎士の鮮やかな逆転。
しかし、それだけでは終わらない。
「死ねぇっ、死ねぇ、死ねぇぇぇ！」
濡れた地に仰向けに倒れた半魚人に馬乗りになり、狂気に憑かれた少女は、いつまでも、何度でも敵の身体を刻み続けた。

＊

闘技場での戦いを終え、宿に戻ったアンリエッタは、防具を外すと、そのままベッドに横たわった。戦いだけでない気怠さに、もう動きたくない気分だ。窓から夕陽が差し込みだしている。
――今日のはいったい何だったの？
闘技中の陵辱行為、それを歓喜する人々、そして理性を失った自分自身。
そう言えば昔もこんなことがあった。
父がオークによって殺された忘れもしないあの時。
ソルアースの第一王女であったアンリエッタは、国がオーク軍に攻め落とされると、僅かに残った従者らと共に、母の祖国、つまり祖父の治める国に保護される形となった。
それから十数年、同い年の従姉妹姫が社交の術を学ぶ傍ら、アンリエッタはとり憑かれたように剣技を磨いてきた。
全ては父の復讐と奪われた母を取り戻す為。
元々、天賦の才があった彼女は、国内に並ぶ者のない騎士となり、その名声は周辺諸国にも轟くようになる。
そんな孫娘を老王は自慢にも思ったが心配もした。年頃の娘らしい遊びも恋愛もせず、オークどもを殲滅する目的だけで生きているように思えて仕方がなかった。
二月前、オークの支配する国、アンダーポンドでの武闘大会の話を聞いたアンリエッタ。その大会では優勝者に、望む如何なる褒美でも授けるという。たとえそれがオーク王ピッグポールの妃であってもだ。
アンリエッタは祖父に出場の許しを得ようとしたが、当然のように反対される。
諦めきれないアンリエッタは、警護の騎士らの目を盗んで、城を飛び出し、そして今に至っている。
緩やかに眠りに誘われていたその時、

部屋の扉が叩かれた。既に窓の外は夜闇に包まれている。
頼んでおいた食事が運ばれたのかと思ったが、立っていたのは、身なりの良い中年男性だった。
「アンリエッタ様ですね。私は武闘大会の運営責任者、カーターと申します」
人間である。オークが支配する国とはいえ、彼らの絶対数は少なく、国民の多くは人間であり、責任ある地位にいる者もいた。
怪訝な顔をするアンリエッタに、カーターは深々と頭を下げた。
「本日の試合では誠に失礼なことをしてしまいお詫び申し上げます。ですが、あれはオークどもに命じられ、仕方なくしたことでした」
運営責任者が言うには、運営委員は全て身内を人質にとられていて、言うことを聞かざるをえないのだと。
簡単には納得できない。だが、涙まで流してみせるカーターに、自分はこの国の人々のことを何も知らないのだと思うように努めた。
「では、貴男方もオークの被害者なのですね。もういいわ、幸い、勝つことはできたわけですしね」
「それですがアンリエッタ様、不躾ですが、お腹の調子はいかがですか？半魚人はおそらく、貴女のお腹に卵を産みつけています」
「それは……」
肛辱を思い出し、アンリエッタは頬を赤くする。
「まだ、出ていないのでしょう。半魚人の卵は放っておくと、どんどん大きくなり、やがて産まれた子供が腹を食い破ってしまうのです」
「そんな……」
顔面が蒼白となる。
「この薬をお飲みください」
カーターが差し出したのは、緑色の粘り気のある液体の入った小瓶だった。とても美味しそうには見えなかったが、薬とはこんなものだとも思う。
「それは卵を下す物でございます。せめてものお詫びにと、オークの目を盗んで持ち出したのです」
どこまで信用したらいいものなのだろう。国を失ったとはいえ、世間知らずな姫君は、卵の恐怖も感じて、薬を受け取った。

＊

三回戦が始まり、アンリエッタの顔色は優れない。緊張のせいばかりではなく、体調が変なのだ。
貰った薬はその場で飲み干す。だがそれほど即効性ではないのか効き目が薄いのか、まだ半魚人の卵は腸内に残ったままだ。
卵は昨日よりも成長していて、遠目から目立つほどではないが、腹部は膨れている。かなりの違和感があった。
そのうえで、少しは薬の効果が出ているのか、時折、お腹がゴロゴロと鳴って、鈍い痛みが走る。
体中が火照ったような熱もあった。
――ここで棄権なんて、できないわ。今日の相手はシードだというし、強敵に間違いはない。気合いを入れないと……。
黒のインナースーツは替えがあったが、やはり胸部と腰回りの防具は返されていない。武器だけは抗議が通って、いささかましな大剣が与えられた。
控え室に出番が告げられる。
アンリエッタはパンっと両の掌で自分の頬を叩き気を引き締めると、闘技場へと向かった。
連日の観衆の多さであるが、今日は特に立ち見もいる超満員である。
「昨日のエロい女騎士と、あの方の対戦か、こりゃ楽しみだ」
そんな声が聞こえてきた。
対戦相手は余程の人気者なのかと考えていると、大歓声を浴びながら、あの方、が現れた。
その姿を見た途端、アンリエッタの鼓動は跳ね上がり、これまでにない激しい憎悪が込められた闘気、いや殺気を発する。
豚顔の巨体――普通よりも二周りほど大きいが、紛れもないオーク種で、左目に剣で刻まれた古い傷があった。
「ピッグポール！」
オークが治める国アンダーポンドの王にして、父を殺し、母を奪っていった憎き仇である。
その醜悪な顔、幼かった自分がつけた傷、忘れはしない。
アンリエッタは開始の合図を待たずして、剣先を向けて、突撃する。
頭に血がのぼりながらも、ここで敵将の首をとってしまえば、アンダーポンドは瓦解するとの計算も働いた。
それがアンリエッタの行動を鈍らせる。
その為、単調にもなった。
ピッグポールの大盾で姫騎士の剣は弾かれ、そのどっしりとした山のような体型はびくともしない。
その場を動かぬ敵の周囲を走り回り、左右から、背後から、二撃、三撃と繰り出した。
僅かにオーク王の体勢が崩れる。
決定的な隙を見つけ、
「父様の仇、お母様を返せぇ！」
懐に飛び込もうとしたその時、
ギュルるっ――耐え難い腹痛がアンリエッタを襲った。
――こんな……時に……。
命のやりとりに集中している時は、激痛も意識から追いやるはずなのに、それを簡単に凌駕してしまう排泄衝動を伴う圧力。
反対に姫騎士に隙が生じて、
「そろそろか……」
ニタリと笑ったピッグポールの棍棒がアンリエッタに叩きつけられた。
「ぐはっ……」
姫騎士のショルダーアーマーに罅が入り、一瞬の目まいの後、彼女は地に膝をつく。
――まずい、全身が痺れて……、でも何？　あそこが……ジーンとして……。

ん？ステラのやつはどうした？
そういや朝から見てないわね
あいつまたひとりで出かけやがったな
女ハンターの背後に恐ろしい魔獣が迫る……!!
ったく変なとこに迷い込んでなきゃいいが…
カン
カン
カン
キラ
キラ
おいい純度♡
洞窟に潜む罠
漫画 COMIC 緋乃ひの

いやー
こんなとこに
手付かずの鉱脈が
あるなんてね
立入禁止
みんなには
悪いけど
ひとりじめね
……は？
ズ
ズ
ズ
ズ
ズ
じゅるっ
じゅる
じゅるる

なんだこの気持ち悪いの!?
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ
くっ 初めて見る魔物だけどやるしかないか
ジャキッ
ぷにゅん
だあああっ!!
え…!?

あぐっ！
く…刃が通らない…
どんな表皮してんのこいつ…ッ
きゃあっ!?
ゴボ
ゴボ
ゴボ

しまっ…
ウウウウ
ニュ
これ…麻痺毒!?
やば…体が痺れて…ッ
がと
がと
がく
ポロッ
ぶる
やだ…
ぶるぶるぶる
食われ…
ガバ
ひっ!?
ア
ア
ア

う…

あ
あれ…？

え…

なにしてるの…？

ぐぷ
ぐじゅ

じゅるっ
ずるっ
じゅるるっ
じゅる

ぎゅるん

ぞぞぞっ
ぞぞ

ひゅいっ!?

びくっ

うあぁっ…

しょ…触手が這い回ってる!?

ぞくぞく

ぞくっ

ぐる

んっ

こゅる

にゅる

ぐちゅ

ぞぞぞぞ

にちゅ

ふあっ!?

ち違う…!?

ひゃ…

ちょっ…

ぎゅむっ

ぬる

にちゅ

やめっ…

こいつ…私を食べる気じゃなくて…

ままさか…

こいつの体液やばい…ッ
体中シビれて頭がクラクラするっ…
やっ…
な膣内まではいって…!?

——その日
我々人類は
異形の者達との
戦いに敗れ…

全てを奪われ
全てを失った…

光…希望…
そして——

ゲス…

尊厳までも…

異形（ヒュドラ）に囚われし姫は
女から雌へと成り下がる……

漫画（COMIC）／焔（ほむら）すばる

深き者達
Deep Ones

気分はいかが？
アデル姫

くっ…
何も言うこと
なんて無いわ！

フフフ♥
気のお強いこと

好きよ
そういうの

何をするつもり
ヒュドラ…っ！

わかって
いるでしょう？

かつて高貴で
麗しき存在だった
貴女も…

他の雌と同じよう
このヒュドラの
下僕となるのよ

ピチ
ボゲッ
嫌っ
嫌あっ
嫌ああ!!
どう？
淫縛具(バイオハーネス)は気持ちいい？アデル姫♥
ビク
んくぅっ
ビク
私がこんな姿を晒すなんて…っ
こんなぁ…っ!!
ブルンッ
フフ♪
ブルンッ
ゲ…
んあ…
な…何!?
乳首キツいでしょコレ・外してあげる♥
嫌ああ

んっ♡♡
ビクッ
ズリ
あああぁぁッ♡
何…!? 母乳っ!!?
いい噴きっぷりね
さすがお姫さま♥
淫縛具で
淫らに改造された
ご気分はいかが？
そんなぁっ
んっ♥
んくっ♥
嫌ぁっ……
しかし大きくて
いやらしい
乳首だこと♥
アレに
吸わせるのが
勿体ないわ
んむっ♥
んひぃっ♡
んぁっ
ああっ
いやぁっ
んひぃっ♡
あぁあああっ♡
おおっ

いやぁっ乳首っ…
いやぁぁっ
ぐりぐり
んんっ
んんんーっ
ぎゅっ
ヤァァァァ
フフフ…♥ 乳責めだけで下も果てるなんて♥
はーっ
ビクッ
ビクッ
いや…
こんな…っ
ビクッ
なら… 下の口も責めてあげる！
レロ…
レロ…
!? そこは!!

ぢゅるるっ
ぢゅぽるる
ぢゅぽ
ビクッ
あっ
嫌っ……！恥ずかしいのに屈辱なのに…！
こんなヤツにアソコを吸われて感じるなんて嫌ぁ!!
ブビュル
ブビッ
いやぁぁっ
ぢゅぽ
んはぁぁぁっ
んむっ
ぢゅぽ
んあっ
ぢゅぽ
ひぃっ
んあぁ
おぉぉ
クリトリスまでこんなに膨らませて♥人の上に立つ者なのにイヤラシイのね
もう…やめ…

光魔少女メイ
拘束魔具の虜
第2章 予期せぬ陵辱、闇の侵蝕
外れない触手下着——望まぬ肉悦が平穏を崩し始める!!!
小説 NOVEL／高岡智空（たかおかちから）
挿絵 ILLUSTRATION／草上明（くさかみあきら）

暗闇に包まれた一室で椅子に腰かけ、傍に置かれるテーブルに肘をつき、僅かに顔を俯かせた少女は笑いを抑えられなかった。

「随分と愉しそうで……なにかあったかな」

絨毯の敷かれる床に伏せ、退屈そうな生欠伸をもらす狼は、主である少女に問いかけた。間髪を入れず、問われるのを待っていたように少女は返す。

「なにか――ではないわ。決まっているでしょう、仕掛けておいたミミックの成長を確認したのよ……つまりは、あの女の発情ぶりをねぇ？」

薄いヴェールに覆われた口元が、ニンマリと嗜虐的な愉悦の笑みを描く。

「家だろうと学校だろうと、街中であってもお構いなしよ、あいつときたら！　オマンコとケツマンコ吸い上げられて、すぐに発情してトイレでオナニー三昧っていうんだから……っっ……」

笑いが止まらないという様子で、彼女の瞳が細められていた。それをチラリと見やり、やれやれと肩を竦める仕草を見せ、狼は瞳を閉じる。

「それで、どれほどに成長を？」

「その間、あいつの垂れ流すのを貪り尽くしたんだもの。信じられない成長速度だわ……たったの十日やそこらで、ここまでになるなんてね……」

光魔少女メイの股間に取りつく、淫猥な闇魔生物サキュミミックは、闇魔少女のヤミヨが自ら生みだした生物だ。その際に、成長データは彼女が望んだときにいつでも伝わるよう、パスが繋がれている。

そのおかげでヤミヨは、貪欲な触手とその宿主がどんな状態に陥っているか、四六時中監視することができていた。その現在の状況を繰り返し脳内で確認しながら、ヤミヨは笑いを溢れさせる。

「随分と餌を与えたものね……小さなバイブと紐程度に過ぎなかったあれが、いまじゃショーツ並に広がっているんだものっ……くっ、ふふっ……」

そう――淫裂から肛門までを線で支配していただけの肉触手は、その大きさを薄く広く拡張し、面で支配している。いまやメイの股間や下腹部を覆うほどに、目覚ましく成長を遂げていた。

「あはははははっっ！　これで簡単には引き剥がせないわよ……しかも、お尻の穴にズッポシなんでしょうっ⁉　けして脱げない触手のパンツ穿いて、お尻の奥まで犯された状態で――どんな顔を晒しながら、学校に通うつもりかしらっ……」

自分に度重なる屈辱を与えた少女が、通う学び舎で晒すことになる恥辱を想像し、歪んだ悦びを抑えることができない。身を抱き、背筋を震わせながら、ヤミヨの吐息が荒く、熱く乱れてゆく。

「はぁっ、ふぅぅ……でもまだよ、メイッ……そのままもっと育てて、どんどん支配されて……学園中で乱れ狂う、淫乱牝に堕ちなさいっ……」

身悶えるような声をもらす彼女を見上げ、黒い狼――ヤミヨとの契約者である闇魔生物のリンドは、もう一度、退屈そうな欠伸をもらすのだった。

◇

「――嘘、でしょ……」

触手に寄生され、十数日ほど過ぎた朝――。

いつものように目覚め、着替えようとしたところで違和感を覚えた芽衣は、姿見の前に立ち、パジャマを半脱ぎにしたところで呆然とさせられる。

（な、なに、これ……昨日までと、全然っ……）

ショーツ越しにもわかるほど――否、ショーツがグッショリと濡れて、その下に広がる光景がくっきりと透けて見えていた。濃厚な肌色、あるいは桃色に近い鮮やかな色素を纏う触手が、ショーツのようなサイズにまで広がり、股間を包み込んでいる。

「ど――どうしてっっ……んひぅっっ⁉」

驚く芽衣を嘲笑うかのように、穿かれた状態にある触手はグチュグチュと蠢き、太ももの付け根から腰骨の下辺りまでを、念入りに撫で回してゆく。

「んぁうっっ、はっ、んっふぅぅっっ！」

ベチャベチャと自身の粘液を絡みつかせながら、肌を丁寧に擦り、お尻を舐め、股間を突つき――そして、双穴が弄り回されていた。

（ま……待って、ちょっと――いやぁぁっ！）

ゾクゾクゾクッと背筋が痺れ、膝が笑い、腰から崩れて尻もちをつきそうになる。内股になって懸命に堪えながら、芽衣は静止を求めて手を伸ばした。

「トイ、レッ……行く、からぁっ……」

貪欲な触手――サイズを増し、さらに食欲が増したかのような勢いで蠢くそれは、宿主である芽衣に朝食を求めているのだ。おぞましいパラサイトの横柄な要求、芽衣はそれを拒めないのだが――。

（こ……このぉっ、バカにしないでっっ！）

紐状の拘束具だった昨晩までとは異なり、これだけ面積が広がれば、逆に引き剥がしやすいのではないだろうか。肌との間に隙間を作れれば、多少は動きやすくなるはず――と。

そう考えた芽衣は触手ショーツにそっと指を這わせ、下腹部を押さえつける、ショーツのゴム部分に当たる箇所を、そっと撫でつけた。

「ふっ、ぐっっ……んぁうぅっっ！　あはぁっ！」

けれど――吸いつき密着する触手に、隙間などあるはずもない。

「ひゃぐぅぅんっ⁉　んひゃっ、ひゃめぇぇっ！」

反対に、抵抗を見せたことを悟られたのか、触手は猛抗議するように暴れ、のたくり、一回りほど大きくなった触手肉幹で菊粘膜を弄り、穿り、さらに大量の腸液を滴らせてくる。

「わかっ、わかっだがらぁぁぁっっ！　やめっ、やめてっ、あぐぅぅっ！　いひっっ、イッひゃあぁぁっっ……ひぐっっ、あうぅぅっっ！」

ガチガチと歯を打ち鳴らせ、全身を震わせながら、

トイレに駆け込むこともままならない芽衣はベッドに倒れ込む。せめて声だけでもと、シーツを握り締めて引っ張り、唇で強く噛み締めた。

「んっっ、ふぅっっ……んんんぅぅぅ――っっ！」

股間から痛烈に駆け上がる、全身を雷に撃たれたような痺れに、芽衣は尻房を大きく突きだす。まるで男を誘うように淫猥に、フリフリと愛らしく揺すりながら、何度も身体を跳ねさせ、震えた。

「んふぅぅっ、ふぐぅっっ……おっ、んっっ……んっはぁぁぁ……吸って、るぅぅっっ……」

迸る愛液、噴きだす牝潮、さらにはドサクサに紛れてもらしてしまった小水までが、触手に吸い上げられてしまう。その屈辱と羞恥に、そして身体中を弛緩させる甘い快感で真っ赤になりながら、芽衣は絶頂の感覚に束縛され、ビクンッビクンッと情けなく痙攣するほかなかった。

◇

触手のキャパシティにも限界はある。

凄まじい絶頂の直後、いつものように強制排泄をさせられることになり、トイレへ向かい、腸内と膀胱を綺麗さっぱりと空っぽにされた。そして部屋に戻って制服に着替え、学校へ向かう。

（下着つけないで、制服着るなんて……）

汚れたときの処理も考え、ショーツは諦めた。触手がカバーしてくれる状態に甘え、登校中はずっと、股間を覆われながらも穿いていないという、スースーとした感触を味わうことになる。

妙にいたたまれない感覚に晒されてはいたが、そればかりを気にしてもいられない。触手ショーツの奥には、蠢動を控えているとはいえ、お尻の穴は触手塊に犯されたままなのである。そして彼らは、空腹になればすぐさま淫肉を貪りだすのだ。

『――大丈夫よ、芽衣。絶対外してあげるから』

（うん……ありがとう、シュカ……）

母親に見つかることを警戒してか、シュカは眠るとき、クローゼットの中で布団に埋もれている。そのせいで朝の惨状には気づかなかったようだが、目が覚めてからはすぐに、触手の解析を行った。

成長こそ遂げているものの、その行動と作用は変わらない。引き続き魔力を注ぎ、異物として認識されれば、その時点で触手への切り離しと攻撃が可能となるはず、それがシュカの見解である。

（そうだよね、ここで堪えなきゃ――）

そう考えた芽衣は、触手による陵辱や影響を懸命に抑え込み、登校中も生徒会長としてのイメージを保ちつつ、友人や後輩たちに挨拶をしていた。

「おはよー、芽衣」「おはようございます、会長」

「う、うんっ、おっはよう！　今日も頑張ろう！」

笑顔で返しつつも、股間の異常がバレていないかと、ヒヤヒヤさせられる。そうして、いつ訪れるかもわからない触手の陵辱を、延々と警戒していた。

とはいえ――警戒することで得られるのは、それが訪れた際にすぐ対応できるか、為す術なく翻弄されてしまうかの違いでしかない。

「た……耐え、な……きゃっ……くふぅっ……」

その日の一時間目は、体育――夏の陽気を冷ましてくれる、ありがたい水泳の授業である。

（あっ、あぁぁぁ……もおぉっっ……っ!!）

だが、ありがたいはずの水泳でさえ、強制的に火照らされる芽衣の身体を冷ますには至らない。授業が始まり、シャワーを浴びてプールサイドに並んだところで、飢えた触手のおねだりが始まる。

（くふっ、んふぅっっ……アソコとぉ……お、お尻で……モゾモゾ、くる……んっっ……）

触手の性質の悪いところは、いきなり激しく動かないところだ。微振動と数ミリ程度の抽挿によってゆっくりと淫肉をこなれさせ、挿入の違和感に慣れていた官能を蕩けさせてくる。もっとも、それがなくともショーツのように張りついた触手は、その内側で柔らかな肉粒やひげ根のような触手を無数に蠢かせており、芽衣は淫部や太ももの付け根、尻房を常に撫でられ、舐められているような状態だ。

（はぁぁっ……こ、れっ……た、立って、られないよぉっ……んはぁっ、ふぁぁぁっ……）

せがまれる前からトロトロと愛液を滴らせ、蜜穴を全開にしていた芽衣は、僅かな刺激だけで瞬く間にスイッチを切り替えられてしまう。

「んっ、あっ……ふっ、くふぅぅっ……」

背筋がゾクゾクッと震え立ち、腰が無意識に前後に揺すられ、唇が緩み、瞳が蕩けだす。喘ぎがもれた瞬間、友人たちが不思議そうな顔でこちらに顔を向けたのに気づき、芽衣は慌てて唇を噛んだ。

（っっ……はぁっ、んっ……み、見られたらっ……乳首、勃ってるのっ……ば、バレちゃうぅ……）

慌ててタオルを引き寄せ羽織る、その傍に友人たちが集まってきた。

「芽衣、どうしたの？」「気分でも悪い？」

「う、んぅっ……へ、へい、きぃぃ……」

かろうじてそう答えると、ニッコリ微笑んで彼女たちに手を振る。自分の泳ぐ番でなかったことだけは、幸いだった。プールサイドに座り、タオルを羽織っていても注意されることはない。だが――。

（あっぐぅぅぅっ……んぅっ、はぁっ……またっ、激しくぅぅっ……ふぁっ、そこぉっっ……）

股間をピッタリと包み込んだ触手膜の内側では、それらの分泌する淫液が触手によって念入りに塗りつけられ、卑猥な水音が響いていた。

陰唇に無数の触手が絡みついて淫裂を開き、粘膜の一筋一筋が舐め上げられる。菊皺も同様、皺の隙間を細い触手に吸いつかれ、舐め上げられながら引っ張られ、否が応にも官能を刺激される。

「んっふぅぅっ……ふぐっ、あぅっ、あっ……だめ

っ、そこだめぇ……お尻、舐めちゃやぁぁ……」

その時点ですでに、芽衣は全身をガクガクと震えさせて、緩んだ唇から滝のような涎を流していた。

（こん、ら……らめっ、れ……れっひゃいぃ……）

鏡などなくても、自分がどんな顔になっているかはよくわかる。淫欲に表情は緩み、瞳は垂れ、ともすれば舌も伸びきっているはずだ。それを級友に見られることだけは避けたかった。

「んぐっ……あ、うぅぅっっ……」

膝を立てて座る、その膝に両腕を重ねて顔を埋め、なんとか引き締めた唇を強く噛む。この変態触手に抗いたかったが、こちらから手をだせない、抵抗の術もないという状況では、どうしようもない。

（は、ひゃっ……はや、くぅっっ……済ませて、よっ……こ、のっ……食いしん坊っっ……）

この直後に訪れる衝動を考えると、終わったらすぐにプールを出て、トイレに向かわなければならないのだ。水に入って余計な体力を使いたくはないし、泳ぐ番になってから言いだすのも不自然であり、さらには恥ずかしいものがある。

（ほ、らっ……ほらっ、ほらぁっ……あぅっ!?）

無意識にお尻を揺すり、股間を床に押しつけんとするように、芽衣の腰がはしたなく動いていた。それと同時に、数ミリ程度だった触手の動きが、少しストロークを長くした抽挿へと変化し、さらにはっきりと、菊壺に触手肉棒の形を刻み込んでくる。

「はふっっ……んっ、くふぅっ……ふぅっ、んぁっ、あはぁぁ……な、んっ……こんな、にぃっ……」

昨夜よりも明らかに太くなった触手は、先端部分が茸の笠のように膨らんでいた。ひと際大きく張りだしたその部分が、蕩けた腸襞をガリガリと抉ってゆく。一掻きされるだけで腰が砕け、刺激に緩んだ淫肉穴の奥から、トロトロと恥ずかしい汁が溢れてしまうのを止めることができない。それらは淫唇を覆うように張りつく触手膜によって余さず吸い上げられ、その刺激もまた、粘膜に伝えられる。

（だ、めぇぇっ……お尻っ、こんなっ……あはぁぁっっ……ずっと開かれて、奥っ……あぁぁっ、奥までぇっ！　来てるっ、太いの来てるぅっ！）

もはや股間の周辺を擦られるだけで愛液と腸液が滲み、それを感じ取ったのか触手は、結腸に届くほど深くまで、己の身を沈めてきた。その瞬間に、ビクゥッと背筋が伸びきって頭が跳ね上がり、芽衣は慌ててタオルを被り、その端を唇に咥える。

「んふぅぅっっ……ぐっ、んんぅぅっ……はぁぁっ、あっ、あぁぁっ……だ、めっ……そこっ……」

限界ギリギリまで昂ぶらされた官能を、腸肉の奥へ突き立てられた触手が、弄ぶようにキープしていた。太い亀頭を押し込み、グリグリと螺旋を描いて肉壁越しの子宮を刺激して、脳髄が蕩けるような甘さを注ぎ込まれる。同時に、淫裂の肉襞を掻き分けた触手群は、その奥に埋もれていた、芽衣の牝欲を誘う急所を剥きだしにしてゆく。

（い、やぁぁっ……いま、しちゃだめっ……そっちは、本当にいっ……いひあぁぁぁっっ!?）

濃桃色の肉粒をプリッと剥きだされ、それを触手で瞬く間に覆われていた。強く縛り上げられ、締めつけられ、その状態で強い摩擦を浴びせるように、敏感な淫核が扱き上げられる――。

「んきゅんっっっ！　んっっ、ふぁっっ……あぐっっ……んっ、ふっっ……くふぅぅっっ……」

一瞬にして視界に火花が散り、頭の中に光の奔流が満ち溢れた。四肢が身体を抱くように縮こまり、ビクッビクッと激しい痙攣に襲われてゆく。

（はふぅぅっっ、あんっっ、あっ、イクッッ……イッ、てるっ、これぇぇっ……イクぅぅっ！）

タオルを噛み締める口端からも涎がポタポタと滴り、緩みきった双穴は触手に蹂躙されてゆく。尻穴はすでに遠慮もなく触手が抽挿し、直腸を擦られ、結腸を叩かれるたびに、脳天が痺れさせられた。

蕩けた淫裂は、おもらしのように愛液と牝潮を吹きこぼし、それがすべて触手の膜に受け止められる。細い触手が陰唇に噛みついて吸い上げ、さらに微細な触手は処女膜を潜るように奥へ達し、滴る愛液を直接啜り上げているのがわかった。

「はっ、ふっ……おぅっ、んっ……んんぅっ！」

声にもならない呻きを響かせ、込み上げる絶頂を体内に抑え込みつつも、甘い波を受け止める。周囲にクラスメートが大勢いる、その中で味わわされる絶頂の味は、羞恥の極みであり――。

（こん、な……とこ、なのにぃっ……気持ち、いっ……んっ、ふっっ……んぁぁっ……）

まさしく甘露と呼ぶべき、麻薬のように芽衣の理性を蕩かす甘さを秘めていた。もう立ち上がれなくなるほどに足が揺れ、腰砕けになり、垂れ流れる愛液が粘膜を伝う、その刺激にさえ酔いしれそうになる。だが、いつまでも座ってはいられない。

（っっ……い、かない、とっ……）

最後の最後まで、芽衣の官能の逆りを味わおうとする貪欲な触手が、股間を蹂躙し快感を送り込んでくる。唇を噛んでその刺激を押し殺し、芽衣はフラつきながら、懸命に立ち上がった。

「あ、ひっ……は、のっ……っっ……あのっ！」

「どうしました、響（ひびき）さ……ん――」

授業を見ていた教師に声をかけると、こちらを向いた彼女の顔が、一瞬強張るのが見えた。自分がどんな表情を見せているのか、それを想像するだけで恥ずかしくて堪らず、真っ赤になった芽衣は顔を伏せ、抑えた震える声で伝える。

「あ、のっ……少し、き……気分が、悪く、てぇ……んっ、はぁっ……ほ、保健、室に――」

「え、ええ、もちろんです。保健委員は……」

著者近刊　草上明先生とのタッグ作品はこちら：『魔法娼女理愛　獣欲に嵌まる母娘』『神聖騎士オリアナ　淫魔の牢獄』『性感淫魔エステ　搾精コースはじめました』『お嬢さまはペロちゅーLOVE！』『妹とラブる！』『もっと！妹とラブる!!』　好評発売中！

「大丈夫っ、ですっ……ぅっ、んぁっ……そ、れじゃ……失礼、んひぃぃっ……ひま、ふ……」
話している間も、絶えず注ぎ込まれる快感にモジモジと太ももを擦り合わせ、涎があごを伝い落ちていた。それを誤魔化し、タオルで顔を覆うと、おぼつかない足取りでプールサイドを後にする。
（ふっ、はっっ……なん、れぇぇ……おさっ……治まら、なひぃぃ……ふぐっ、くぁぁんっっ……）
一歩踏みだすだけで、痛烈な刺激が股間に伝わり、淫裂の奥へ流れ込んでくる。開かれた肉皺がジンジンと熱く疼き、蕩けた肉襞が何度も抉られ、気が遠くなりそうなほど心地よさに満たされる。
「んっふぅぅっ……はふっ、あっ、あぁぁっ！　うっ、んぅぅっ……まだ、動いてるぅっ……」
サイズが膨らんだせいなのか――触手の食欲は、まだ衰えていないようだった。朝はいつも通りだったから油断したが、いま思えば、これほど短いスパンで求められたのは、触手自身が、成長と食欲の増進にようやく気づいたからなのかもしれない。
「もうっっ……んっ、うぅぅっっ！」
トイレに避難するつもりだったのに、そこまで持ちそうになかった。執拗にクリトリスが扱き立てられ、菊穴はゴリゴリと犯され続けており、咥えついた肉皺はそのたびに引き伸ばされ、狂おしいほどの疼きが下腹部に満ちる。
「こ、れぇぇっ……あぁぁっっ！　だめっ、もうだめぇえっっ！　はぁっ、あうっ、んはぁっ！」
人のいない、プールのトイレよりさらに離れた、体育館裏のトイレ近くまでは来られたが、もはや限界だった。体育館から繋がる、屋根つきの渡り廊下のようになったその場所で、柱に縋りついて立った芽衣は、内股の脚を折って腰を突きだし、陵辱される尻をいやらしく振って、身悶えてしまう。
「はおおぉおっっ！　おぐっっ、あぁぁっっ、えぐっっ、れりゅぅぅっ！　おひりっ、らめっっ……あっあぁぁっ！　らめ、らのにぃぃっ……」
肛姦の刺激と淫核への愛撫、それに合わせて無数の触手があちこちの粘膜襞を、肌を舐め上げる快感に背筋がゾゾッと粟立っていた。触手が引き抜かれ、それに合わせて肉皺が捲れてゆく。その刺激に腰も引け、立ちバックで犯されているようなはしたない姿勢になりながら、芽衣は触手から与えられる快感に、完全に屈服させられていた。
「ふぎっっ、んぁうぅぅっ……きゃふぅぅっ！」
抜けかけた触手が再び押し込まれると、膨らんだ先端部分が結腸を抉り、子宮を叩き、鋭い電流が一気に突き抜ける。誰もそこにはいないのに、自分を犯す相手から腰を叩きつけられ、尻を打たれ、その衝撃に押されたように腰が進み、背中が跳ねる。
「あっ、うふぅぅっ……まだ、激しくなるのぉぉ……？　ひぐっっ、んはぁぁっっ！　はぁっ、あうぅっっ……んまっ、またっ、きちゃうぅっ……」
透明人間に犯されてでもいるように、芽衣は勝手に腰を振って膝を躍らせ、自分の官能がまたも絶頂に追い詰められていくのを感じていた。
（んひぃぃっ……ひか、ら……仕方、ないよね……だ、だって、これっ……しないとっ……と、止まら……ない、もぉんっっ……んっくぅぅっ！）
そう言い聞かせ、甘んじて触手の責めを受け止める――しかし、本当にそうなのだろうか。
あまりにも甘美な快感に理性が蕩かされ、媚悦を貪り、受け入れてしまっているのだとしても、芽衣自身にはもう、その区別などつかない。注ぎ込まれる快感に身を委ねており、触手の抽挿、吸い上げに無様な反応を示して、表情を蕩けさせていた。
「あぐっっ、んぅぅっ……くるっ、あぁぁっ、またっ……き、ひゃうっ、はふぅぅっっ……」
そして、絶頂の波が押し寄せ始めると、柱を掴む指にもキュッと力がこもる。足先も再び丸まり、地面を掴もうとしているように強く押しつけられ、脚全体がカタカタと切なげに震えだした。
（だ、めぇっ……なの、にっ……こ、こでっ……イッたらぁぁ……あひぃぃんっ！　おトイレ、行かないと……なの、にぃっ……んっはぁぁっ！）
心ではそう思っていても、もはや身体が動かなかった。腸壁が捲れ、裏返され、抉られる刺激に合わせて腰が引け、お尻がさらに突き上げられてしまう。反対に上半身は頭を下げ、柱に縋りつきながらもズルズルと滑り落ちる。
「んふぅぅっ……ふぅっ、あぁぁっ、おひりっ、ズボズボッ、ひちゃやらぁぁ……いひぃぃっ！」
ついに膝が地面に落ち、四つん這いに近い体勢を余儀なくされた芽衣は、肛姦の肉悦に表情を蕩けさせていた。誰かに見られでもしたら、言い訳のできない格好と顔つき、そして喘ぎ声。だが、それを取り繕う余裕もなく、強制的に官能の限界を迎えさせられ、はしたなく大声を響かせてしまった。
「んひぃぃっっ！　イッ、ひゅ……あっはぁぁ……イッ、クぅぅっ……んぅっ、んはぁぁっ！　だめっっ、ひぐっっ……いっぐぅぅぅんっっ！」
尻房がツンと真上を向き、持ち上げられる。その状態で、まるで犯されているように腰が前後に揺さぶられ、水着と触手に包まれた淫裂の奥では、先ほどの比ではないほど大量の愛液が、蕩ける媚肉の隙間から染みだしていた。
（んひゅぅぅっっ……はひゅっっ、んひぃぃっ……これっ、んぅぅっ、しゅごっ……自分で、するのよりぃっっ……もっと、はげ、しっ……イクッ……）
絶頂に頭が真っ白になっている、その間もひたすら触手の抽挿に菊壺を抉られ、張りだした肉傘に、腸汁も一気に掻きだされる。肉皺を濡らす熱い蜜汁に、底を覆う触手が一斉にむしゃぶりつき、ジュル

ジュルと吸い上げる音までが、身体の感覚から感じられてしまった。
（んぁうぅうっ！　あっはぁぁぁ……吸われちゃってる、全部うぅっ……あぐっ、あぁぁっ！）
自らの淫部から溢れるはしたない汁気が、おぞましい生物の飢えを満たしてゆく瞬間は、幾度味わっても慣れることなどない。それでも、快感の味を刻み込まれた腸肉が、膣肉襞が蜜汁を滲ませる感覚はどこまでも心地よく、尿道を震わせて牝潮を吹く感覚に、快感中枢が痛いほどに刺激される。
（あぐっっ、あうぅぅぅっ……でりゅっ、でっ、ひゃぁぁっ……あひっっ、いっひぃいっっ！　んんぅっっっ、あぁぁっ！　もっ、止まっへぇぇ……）
絶頂の痙攣が訪れてからも、延々と菊肉を貪り続けていた肉触手。それが動きを緩めだしたのは、全身痙攣させられっぱなしの芽衣が、ひたすらにそう懇願してから数分が経ってからだった。
「ほっ、おぉぉぉ……んっふぅぅぅ……」
触手の抽挿が治まり、吸盤のように粘膜襞に張りついていた触手たちが離れだすと、その刺激にピクンッと腰を跳ねさせながらも、芽衣はようやく絶頂の痙攣から解放された。
（ぁ……う、んっ……お、さまった……？）
そうと気づき、立ち上がろうとするも、四肢に力がこもらなくなっていることに気がつく。あまりに激しい疑似性交によって、芽衣の体力は底をつくほどにまで、徹底的に搾り取られていた。
（ふぐぅっ！　あっ、ひっ……ま、待って――）
同時に、背筋がブルッと震え立ち、下腹部に焦燥感が込み上げ、芽衣の顔色がサァッと青ざめる。
動きが止まったということは、触手が満足したということ。そして満足したということは――望まぬ食料を、排泄させられるということだ。
「うっ……あ、ひっ……いやっ、そんな――」
トイレはすぐそばにある。けれどそこまで辿り着くどころか、もはや立ち上がる力すら残されてはいない。そしてもちろん、触手に割り開かれる括約筋を引き締めるなど、どう足掻いても不可能――。
「んふぅっっ……ふぁっ、あぁぁぁぁ……」
糸よりもさらに細い触手がスルリと伸びだし、尿道を潜ってその内側に網を敷いてゆく。十分に範囲を覆ったそれが、一斉に外側へ圧力をかけると、強制的に尿道が開放されてしまう。カテーテルを挿入されたように、芽衣は為す術もなく膀胱に溜まった不浄の蜜を、勢いよく吐きだすしかなかった。
「んひいいいっっ！　あはっ、はぁっ、あうぅぅっ……で、ひゃっ……んぁっ、くふぅぅっっ……」
触手の膜が裂けて開き、逆った小水が水着の股間部分に染み込んでゆく。濡れてもいい水着だとはいえ、着用したまま漏らすなど、まるで赤子か幼児のような恥ずかしい粗相である。
（な、のにぃっ……止まって、くれ、な……んふっっ、んんんぅぅぅっっ……あぁあぁぁっ！）
温かい感触が股間に広がり、さらには吸いきれなくなった水着を越えて、チョロチョロと流れだす。
「はふぅぅっっ……やらぁぁ、おしっこぉぉ……んくっっ、はぁっ、あはぁぁぁ……」
――プシャッ、ジョロロロ……ジョボボボ……
膝をついて開いた脚の間に、突きだした尻房の下方から、仄かに色づいた小水が溢れだし、渡り廊下に黒い染みを大きく広げた。それほど溜まっていたにも関わらず、触手はそちらではなく愛液を得るために自分を辱めたのかと思うと、恥ずかしいだけでなく悔しくて堪らず、怒りに震えさせられる。
（もう、最近おトイレなんてっ……この触手に、無理やりさせられるときだけしかっ……）
このまま強制排便ばかりを繰り返されれば、いつしか我慢することを身体が忘れてしまうのではないか、と恐怖することがある。それでも、これまではギリギリでトイレに間に合い、そこで下着を下ろして服を避けた上で、排泄することができていた。
（――だけど、今回みたいにっ……あふっ、んふぅぅっ……こんな、服着たまま、されたら……）
これほど激しい責め苦で体力を貪られ、動けない状態になれば、水着でない着衣のままでもおもらしさせられかねない。それを延々と繰り返されることで、我慢することを身体が忘れてしまえば、おもらし癖がついてしまうということだ。
触手が外れてくれても、身体に刻み込まれたおもらし癖は残り、学校で、街中で、トイレに行きたいと思った瞬間に排泄が始まってしまう――。
（――っっ⁉　や、やだっ……絶対っっ……）
想像しただけで真っ赤になった芽衣は顔を伏せ、イヤイヤするように頭を激しく振る。そんなことになる前に、なんとしてでもこの触手に抗い、排除する必要があった。

◇

「せめて、少しでもコントロールできたら……」
腸内が犯されたときに、腸汁とともに貪られてしまったのだろう。いまのところ、これ以上の排便は起こらなさそうだった。そして餌の追加おねだりもない――それを確認し、芽衣はフラつく身体を叱咤して、震えながらもなんとか立ち上がる。
「……どうしよう……保健室に――あ、でも着替え……えっと、シャワーが先、かな……」
絶頂の余韻がまだ少し、身体を痺れさせていた。余波によって頭もいつも通り動いてくれず、身体の端々をピクッと扇情的に震わせながら、柱に手をつき、芽衣はシャワールームへ向かおうとする。
（とにかく、着替えて……保健室で休ませてもらって、シュカに連絡して――）
範囲、責め手、激しさのそれぞれを強化したこの

正体を現しなさい！
黒猫!!
睦月を狙う〝黒猫〟は身近に…!?
思春期なアダム
EVIL EYES
天海雪乃
原作：さかき傘
ヴァルキリーコミックス第2巻 あとみっく文庫7巻 好評発売中!!
web版コミックヴァルキリーでも連載中！ http://www.comic-valkyrie.com/
前号までのあらすじ
睦月を狙うFeTUSのエージェント・黒猫の正体を暴くため、同級生の沙耶に詰め寄る天使少女エンジュ。一方、睦月は担任教師の勝江から進路面談を受けていたが…。
……ふにゃ
……へ？

ちょっと沙耶!?
どういうことよ……？
この娘はFeTUS……黒猫じゃない？
罠が仕掛けられた場所に沙耶以外はいなかったはずなのに……
モゾ
「先生にもすーごい怒られたし」

前回のテスト平均がかなりさがっていた

すみません少しゴタゴタしてて集中できませんでした

ポ

……!!

次回はがんばりま……

先生？

ハハハ

ガタッ

ククク…

ここまで予想通りに動くとは運が良かった

え……？

九里空沙耶から
お前たちの
訪れそうな場所を
聞いて罠をしかけた
はっ
あのときは
失敗したが
地遊尼エンジュは
あろうことか
彼女を私だと
誤解したらしい
しゅる
しゅる
しゅる
今日お前を
最後にしたのも
計算のうちだ
地遊尼の性格なら
必ず近いうちに
九里空を問い詰める
それも藤田
お前から離れた
ところでな

だから九里空に観察用のバネイリをしかけた

上手く罠にかかったな

ひ……あっ

この変装ともようやくおさらばだ

そんな……勝江先生が……

地遊尼エンジュからの攻撃は録画できた

あちらに抗戦の意思ありと判定

これより迎撃行動として藤田睦月の身柄を確保する

黒猫!!?

ついに最終回――魔王との最終決戦!!
フィオナとセリーヌは大陸の平和を取り戻せるのか!?
イセリア英雄戦記
the Legend of the Iceryа war
最終話 新たなる英雄戦記
小説 NOVEL 栗栖ティナ
挿絵 ILLUSTRATION 牡丹

「耳障りな泣き声だ。……貴様らが産み落とすべきは、我の種で孕んだ子のみ。不要なものは処分してやろう」
冷たく言い放った魔王が、元気に泣く赤子たちを踏み潰そうと足を上げる。
「や、やめて……」
助けに入る余力もなく、フィオナは産まれたばかりの我が子が命を奪われる様を呆然と見守るしかなかった。
だが――その時。
「グァァァァァァァァァッ！」
まるで獣のような咆哮をあげ、巨躯の男が魔王へ襲いかかった。
「……ウォルガード……様」
手足を、歯や顎まで砕かれて命尽きたかと思われていたウォルガードは、魔剣アロンダイトの柄をわずかに残っていた数本の歯で噛み締め、その切っ先を魔王へ向けて突進する。
「何……ぐっ！」
不意を突かれた魔王は慌てて避けようとするが、それは一歩遅かった。
漆黒の刃が首筋を深く切り裂き、血飛沫が辺りに飛び散る。
「き、貴様！」
「グオオオオオオオオオオオオ！」
傷口を片手で押さえた魔王へ、砕けた足でどうにか踏みとどまったウォルガードが再び襲いかかる。
「クズが……調子に乗るな！」
黒と赤の瞳を見開き、睨まれるだけで息が詰まるような殺気を放つ魔王が無造作に右手を前へ出し――。
「がっ……」
前のめりに突進してきたウォルガードの胸を、容易く刺し貫いた。
弱々しい呻き声とともに咥えられていた魔剣が力なく落ち、カシャンというむなしい音を合図に、傷から滝のような勢いで鮮血が溢れ出した。
「人の分際で、我に手傷を負わせるとは……どこまでも忌まわしい奴よ」
魔王は舌打ちをしながら、まるで糸の切れた人形のように脱力したウォルガードを睨みつける。
「や、やめて……それ以上は……」
最後の力を振り絞って戦った剣士がこれ以上嬲られるのを見たくない。
フィオナがそんな思いで必死に訴えると、血まみれのウォルガードがその青ざめた顔をこちらへ向けてきた。
正確には王女の隣……未だ悦楽と出産の余韻に息を切らすセリーヌへ。
「セリーヌ……貴様との決着は、どうやらあの世でつけることになりそうだな。だが、急ぐなよ。俺と貴様の子を……しっかり育て上げてから来い」
続けてこの張り詰めた空気を察しているのか、未だ泣き続けている赤子たちを一瞥したウォルガードは、今度は倒れたまま動かないでいる妹――メイベルローゼへ視線を向けた。
「貴様が最後のオーギュスタンだ……不本意だが、俺の帝国をくれてやる。立ちはだかるものは蹂躙し、すべてを掴め……妾の娘だからと言って卑屈に生きることは許さんぞ。この俺の帝国を継ぐ者として……妹として」
「遺言はそこまでだ……消えろ」
ウォルガードのか細い声に、魔王の冷たい声が被さる。
胸を刺し貫く腕から黒い衝撃波が放たれ――ドンッと大きな爆発音とともに巨躯の剣士の身体が塵となって消え失せてしまう。
「な、何ということを……！」
最後まで戦い抜いた誇り高い勇士に対する、あまりにも惨い仕打ち。
フィオナはウォルガードがそこに存在していた唯一の名残――地面に広がる大きな血だまりを呆然と見詰め、言葉を失ってしまう。
そんなフィオナに構わず、魔王は付着した血を払うように腕を振り、苛立ちをあらわに舌打ちをする。
「我に傷を負わせた罪、末代まで償ってもらおう。この男の血を引く赤子、貴様も同罪だ。この世に産まれ落ちた痕跡を欠片も残さずに消えるがいい」
泣きじゃくる赤子たち。セリーヌが産み落とした男の子のほうへ視線を戻した魔王が、再び踏みにじろうと言わんばかりに足を上げた。
「あっ、ああ……っ」
未だまともに身体を動かせないフィオナは、見守ることしかできない悔しさに唇を噛み締める。
（こんな時に、何もできないなんて……わたくしは無力です……）
そう諦めかけた刹那。
「あはっ、はははっ……！」
片隅のほうから乾いた笑い声が聞こえて、周囲を目が眩むほどの紅い光が包み込む。
「くっ……身体が……」
今、まさに赤子を踏み潰そうとしていた魔王が、そのままの姿勢で硬直してしまう。この場でこんなことができる能力を持つ人間は、ただひとり――。
「妹……ね。アハッ、散々私を見下しておいて、最期に……本当、どこまでも憎たらしい……お兄様だったわ」
よろめきながら四つん這いになり、紅い瞳で魔王を睨む魔眼姫。
どうにかそちらを振り返った魔王が忌まわしげに顔を顰める。
「貴様も我に抗うか。一度は無様に屈した分際で……」
「ええ、私としたことが気の迷いだったわ。誰かに見下されるなんて二度とごめん……そう思って今まで生きてきたのに。本当……最悪！」
吐き捨てるように叫ぶメイベルローゼの魔眼が、今までに見たことがないくらい力強い光を放つ。
「くっ、この程度の力で我を封じることができるとでも……うぐっ」
魔眼の力に捕らわれた魔王は、顔を顰めて身震いするだけだった。
ウォルガードの遺言に奮い立ったメイベルローゼは、今までにないほど強い力を放っているらしい。
「メイベルローゼ……くっ、わ、わたくしも……」
「ええ、いつまでも私ひとりに働かせないで欲しいわね」

力を使いすぎているせいか、両目から血涙を流しながらも、メイベルローゼは不敵に言う。
彼女に叱咤された通り、ここでいつまでも嘆いているだけなど、イセリアの王女として許されない。
「貴女も……セリーヌ。ウォルガード様の最期の言葉……よく噛み締めてちょうだい……お願いっ」
フィオナはどうにか立ち上がると、魔王に身も心も支配されてしまっている女剣士へ必死に訴える。
「子……私と……おまえ……の……」
セリーヌは膝立ちのまま、まるで火がついたように泣き続ける赤子をじっと見詰めているだけだった。
苦戦する魔王を気遣う様子はなく、明らかに先ほどまでとは違う。
命を賭したウォルガードの訴えと我が子の泣き声が、ようやく彼女の心を動かしかけているのだろうか。
だが、彼女が正気に戻るまで悠長に待っているほどの余裕はなかった。
「この程度の力で、いつまでも我を封じられると思うな……っ！」
「くっ、そ、そんな……魔眼の力が押し返されて……うううっ」
苦しげに呻きながらも必死に睨み続けているメイベルローゼだったが、魔王はその力を跳ね返し、身体の自由を取り戻しつつあった。
「貴様も、この赤子どもと一緒に踏み潰してくれるわ！　覚悟しろ」
一歩ずつ、ゆっくりと魔眼姫へ歩み寄っていく魔王。
もうあと数歩で手が届く、絶望的な状況。だが――この窮地でも希望を捨てずに抗い続ける彼女たちへ、ようやく救いの手が現れた。
「そこまでにゃ、魔王！」
「セフンナ・ニードル！」
「消えなさいっ！　インペリアル・シリングブレイカー!!」
幼さを感じる声に続き、気高き女騎士たちの凛とした声が響き渡る。
「うぐっ……貴様らは……」
放たれた攻撃を咄嗟に上げた腕で防御した魔王だったが、さすがに体勢を崩してよろめいてしまう。
「ミーシャ……それに、エルス、ドーラも！　無事だったのですね」
こちらに駆け寄ってくる三人の姿を見て、フィオナは顔を輝かせた。
「待たせたにゃ、チビオナ。このふたりの洗脳を解くのに思ったより時間がかかってしまったにゃ」
「では、ふたりとも正気に……」
「イエス、マム。第三騎士団の団長の身でありながら、むざむざ敵の手に落ちていたとは……謝罪の言葉もございませんわ」
「ミーシャ様とメイヴェン殿のおかげで、ようやく正気を取り戻すことができました」
跪くエルスとドーラを見て、フィオナが安堵に胸を撫で下ろす。
この窮地に、聖宝具の使い手たちが駆けつけてくれたのは何より心強い。
「メイヴェンは力を使い果たしていたので置いてきたにゃ。でも、問題にゃい……聖宝具の使い手と、セリーヌの力があればにゃ！」
「ええ……魔王を必ず倒せます」
フィオナは未だ茫然自失のセリーヌを一瞥し、ミーシャの肩を借りて立ち上がる。イセリア英雄王国が誇る聖宝具の使い手と大騎士長の合流は、何よりも心強いことだ。
「ははっ、やっとツキがこっちに回ってきたみたいね。あと少し……私が動きを封じておくわ。その間にさっさと勝負を決めてしまいなさい！」
頬を血涙で赤く染めたメイベルローゼが、イセリアの勇士たちを促す。
「ええ。ミーシャ、エルス、ドーラ、魔王を討つために力を貸して！　わたくしが何としてでもセリーヌを正気に戻します。ですから……お願い！」
「「イエス、マム！」」
ミーシャたちの力強い叫びが返ってくるが、セリーヌは未だに呆然と赤子を見詰めたまま動こうとしない。
だが、千載一遇のチャンス。何としてでも決着をつける時だ。
それぞれの武器を構えて駆け出す三人の背を見詰めながら、フィオナは改めてセリーヌへ視線を向ける。
みんなが時間を稼いでくれている間に、魔王を討つ切り札である彼女を目覚めさせなければいけない――が。
「忌まわしい人間共が！　我に対する愚弄の数々……万死に値する!!」
怒りに肩を震わせる魔王が叫ぶと、彼を中心に黒い波動が放たれた。
「きゃああっ！」
聖槍を構えて突進していたエルスが容易く弾き飛ばされ、ミーシャとドーラも見えない縄で縛られたかのようにその場で動きを止めてしまう。
「こいつ、まだこんにゃ力を……」
「我を見くびるな。人ごときが、我の手をわずらわせるなど……！」
魔王の怒りに合わせて波動は強くなり、まるで肩に重石を乗せられたかのようにフィオナたちは跪く。
「っ……ここまできて、こんな。もう少し……目が潰れてもかまわない、だから……くっ、うううっ」
悔しげに呻くメイベルローゼは魔眼の力を発動し続けているが、もう魔王の動きを封じることはできない。
「みんな、頑張って……セリーヌ、お願い、目を覚ましてちょうだい！」
祈るように訴え続けるフィオナだったが、頼みのセリーヌは未だ何の反応も示さず、泣き続ける赤子を見詰めるだけだった。
（神聖魔法で、セリーヌの闇を払えば……いいえ、生半可な魔法で正気に戻せるとは思えません。何か手は……力……魔王に届く力が欲しい）
荒くなってきた吐息に合わせて揺れる豊かな双丘の前で、祈るように両手の指を絡めて心の中で叫ぶ。
そんなフィオナの脳裏へ――。
（ニクイ……テキ……タオス……）

誰のものともわからない、謎の声が聞こえてきた。
ハッと顔を上げ、前を見た直後。
「おぎゃあああああああああ！」
赤子たちの泣き声が一際大きくなり、フィオナの産み落とした子が直視できないほどの強い光を、セリーヌが産み落とした子が魔王を凌駕するほど強力な闇の波動を放ち始めた。
「ぐっ、何なのだこの力は⁉　我が飲み込まれるだと、そんな……！」
うろたえながらも踏みとどまろうとする魔王が、赤子たちの放つ光と闇に包まれていく。
「……何が起こっているの？」
「フィオナ様、お気をつけて」
「わたくしにもわかりません。でも、今……誰かの声が……」
這いずるように近づいてきたエルスとドーラに、フィオナが戸惑いながら答えた時だった。
「怒っている……父親を……殺されて……母親を傷つけられ……」
うつろな表情のまま、セリーヌが小声で呟き漏らした。
「……セリーヌ？　貴女も今の声が聞こえたの。それじゃあ……」
自分の想像を凌駕する可能性を秘めた赤子たちは、産まれ落ちたばかりだというのにその力を発揮しているのだろう。母である自分たちのために。
「負けぬ……我は魔王！　この地上の統治者……こんな赤子ごときにっ」
光と闇の混ざりあう中央で、魔王が怒りに震える声で叫ぶ。
「どうなるにゃ、これは……」
「わかりません、わたくしも……」
手出しすることがためらわれる、激しい力と力の衝突。
光と闇が魔王を中心として渦巻き状に混ざりあい――やがて、それが見上げるほど大きくふくれ上がった。
「我を愚弄するな……許さん、滅ぼす……すべて……スベテ……ホロベ……ホロベ……ホロベ……アアアア！」
激高する魔王の声が、突然、あらゆる感情を失ったかのように平坦なものへ変わってしまう。
直後、混ざりあう光と闇の波動が大きく弾け――浴場をすべて吹き飛ばすほどの大爆発を引き起こした。
「きゃあああ⁉」
「しっかりするにゃ！」
踏みとどまれず吹き飛ばされたフィオナだったが、間一髪のところでミーシャの平坦な胸に抱き留められた。
セリーヌ、そしてメイベルローゼもエルスとドーラの手で救出され、王女のすぐ傍へ集められる。
「これはいったい……っ」
ようやく爆風が晴れ……そこに現れたものの姿を見て一同は声を失う。
直径が王女たちの背丈の五倍はあるだろう、漆黒の黒い球体。
ヌルリとした粘液を滴らせる、無数の触手が絡みあってできたものだ。
その上に、まるで角のように映えているのは人型の上半身。全身が触手と同じく黒に染まった魔王に見える。
だが、その顔は表情を失い、紅い瞳孔にも光はない。ただ半開きのままの口から抑揚のない声を漏らすだけ。
「ハカイ……スベテ……」
声に合わせて触手の一本が横薙ぎに振るわれ、森の大きな樹木が数本まとめて打ち倒される。
さらに高く掲げられた別の触手の先端からは黒い球体が八方へ放たれ、それが着弾した場所は空間ごとえぐり取られたかのように消滅してしまう。
「何なのよ、これ。正真正銘の化け物じゃないの……あはっ、はは……」
立ち上がれずに跪いたままのメイベルローゼが力ない笑いを零す。
「どういうことですの、これは」
歴戦の騎士であるエルスですら、その不気味な巨体に圧倒されて顔を青ざめさせていた。
「身体の震えが止まりません。私としたことが、こんな……」
「無理もないにゃ、こんな剥き出しの憎悪に当てられたら……並の人間にゃら、それだけで発狂する」
自らの身体を抱きしめるようにして呟くドーラの横で、ミーシャも顔を強張らせていた。
ここまで数々の戦いを経験してきた面々でも圧倒されてしまう悪意。
それを見上げるフィオナは、魔王らしきものの口から漏れる声が、先ほど脳裏をよぎった赤子たちのものと酷似していることに気づいた。
「まさか……あの子たちが」
「魔王……様……私の……子……」
セリーヌも気づいたのだろうか、巨躯の魔物へ何かを求めるように手を伸ばしていた。
「どういうことにゃ、チビオナ」
「……想像にすぎません。赤子たちと魔王の憎しみと怒り……互いの負の感情が混ざりあい、そして……」
あらゆるものを破壊する。
その衝動のみで形成されたこの魔物が誕生したのだ。魔王、そしてふたりの赤子を触媒として。
「助けなければ……っ」
母を救うために戦ってくれた、まだ乳すら飲ませてあげられていない愛しい我が子。このまま魔王とともに滅ぼすわけにはいかない。
（でも、どうやって……）
聖宝具の使い手であるエルスとドーラ、大騎士長の名に相応しい使い手であるミーシャ。そして一時的に魔王の動きすら封じた、魔眼姫メイベルローゼ。そしてイセリアの王女であり、英雄王の血を引く自分。
不可能なことなど存在しないと言いたいほど充実した戦力だが、それでも対峙しているだけで身体が凍りついてしまうような威圧感を持つ、破壊神とでも呼ぶべき魔物を打ち倒せるかどうか……自身はない。
「セリーヌ……どうしても貴女の力が必要……お願い……」
未だ魔王の支配から完全に逃れられ

著者近刊　『異世界転生でおねショタハーレムを築こう』『ヤンデレ妹に愛されすぎて子作り監禁生活』『クーマン!ふぁんたじ～　しつけて姫騎士様』『絶対服従!言いなり許可証でお嬢様と調教生活』『僕とお嬢さまの性教育』　好評発売中！

ずにいる親友を、どうすれば正気に戻せるのだろうか。
策を思案する時間を……目の前のおぞましい魔物は与えてくれない。
「ハカイ……スル」
「ま、まずい！　みんな、ここは一旦引くにゃっ、早くっ!!」
殺気にいち早く反応したミーシャが警告する。だが、一同が動き出すよりも早く、破壊神の胴を司る触手の数本が、蛇のように地面を這って美女たちに迫ってきた。
「いけない……きゃああっ！」
「ま、魔王……さま……ぁっ」
両手足を蠢く漆黒の触手で拘束されたフィオナとセリーヌは、大の字の姿勢で宙づりにされてしまう。
「放しなさい！　くっ……」
「フィオナ様……ひうっ、こ、この力……振り払えない……ああっ」
聖槍セルフェザー、聖剣アフロディテを構えてふたりを救おうとしたエルスとドーラもまた、同じように手足を触手で拘束され、そのまま仰向けに押し倒された。
「ふにゃっ!?　またこの姿勢……ひにゃ、放せにゃ、んにゃっ、ああっ」
「ちっ、やめなさい、私はもう二度と頭を下げないって決めた……のに」
同じく触手に捕らわれたミーシャはM字に足を広げた姿勢で宙づりにされ、悔しげに呻くメイベルローゼは獣のような四つん這いの姿勢で、額を地面に擦りつけている。
これだけの面々が一切抵抗することもできずに捕らわれてしまった。
この破壊神が魔王を超越する力を持つことを、身体で実感させられる。
（いけません、このままでは！）
宙づり状態のフィオナの背を、氷のごとく冷たい汗が流れ落ちる。
破壊衝動のみで形成されたこの魔物に、なすすべもなく破壊――殺されてしまうのだろうか。
どうにか振りほどこうとするが、強力な邪気を帯びた触手の拘束はあまりにもきつく、びくともしない。
シュル……不気味な音を立てて蠢く触手の拘束がきつくなり、絡みつかれた手足がじわじわと痺れてくる。
「め、目を覚まして……わたくしの子……英雄王の血を引く子……はぁはぁ……闇に捕らわれないで……っ」
この破壊神に飲み込まれてしまった赤子へ必死に訴える。
だが、上部に生えた魔王の口から放たれる台詞は変わらない。
「ハカイ……スル」
そんな無機質な呟きが漏れた直後のことだった。
「きゃふっ、くうう！　そこはっ、はひっ……イッ、んんん!?」
聖槍に選ばれし金髪の女騎士が、甘い快楽の混ざった叫びをあげた。
「エルス……っ？」
うつむいて足下を確認したフィオナは、そこで繰り広げられている光景に目を見開いた。
「どういうつもりなんですのっ、この……はひっ、胸……ふぁあっ」
悶えるエルスは、蠢く触手に胸の甲冑を上へずらされた挙げ句、アンダーシャツを切り裂かれている。
こぼれ落ちた、形よい豊乳。
狙い澄ましたように他の触手が伸びてきて、根元から絞り出すように締めつけられてしまう。
その姿は姿勢こそ違うが、共にメイズⅦに入った時、魔族の力で生み出された触手に陵辱された時を思い起こさせるものだった。
「はぐっ、あふっ、は、入ってこないで、そこに……わ、私はもう、あのような思いをしたくは……ああっ」
隣に横たわるドーラは、触手が垂らす粘液によって腰巻きを溶かされ、薄い茂みに覆われた下腹部をあられもなく晒していた。
薄桃色の肉裂と、その下で動揺を訴えるようにヒクつく菊門。その二穴目掛けて他よりはやや細めの触手が這い寄り、丸みを帯びた先端で執拗に突き責めている。
「どうなっているにゃ、破壊することしか考えていにゃいんじゃ……んっ、にゃああっ」
幼子が用を足す時のような姿勢にされたミーシャが、抗議するように巨躯の魔物を見上げて叫ぶ。
服の胸元を引き裂かれ、その平たい微乳が丸見えの状態だ。
ショーツもはぎ取られ、広げられた股間の奥、綻ぶ淫裂も晒されている。ぷっくりと盛り上がる大陰唇にミミズのような極細の触手数本が群がって割れ目を大きく広げ、さらに細い針のような触手が桃色の媚粘膜の上部――膣口よりもはるかに小さな尿道口を執拗に突いている。
「破壊って……私の誇りを砕こうとでも……悪趣味にもほどがあるわ」
群がる触手によってショーツを乱暴にはぎ取られ、形よい美尻を剥き出しにして土下座の姿勢を強いられているメイベルローゼが、忌まわしげに吐き捨てる。
その言葉を聞き、フィオナもようやく破壊神の意図を察した。
まずは自分たちを思う存分嬲り、誇りと心を『破壊』するつもりなのだ。
この悪趣味な思考は、取り込まれて一部となっている魔王の影響だろう。
「魔王……さま……あはっ、また私にお情けを……んふっ、ふふっ」
主の気配を感じ取ったのだろうか、フィオナと向きあう姿勢で宙づりになっているセリーヌが、顔の傍へ伸びてきている触手へ愛しげに頬ずりする。
「貴女は、まだ……」
ウォルガードの遺言と赤子の泣き声でわずかに正気を取り戻したように見えたセリーヌだったが、今のうっとりとした表情は、魔王に媚び従う浅ましい牝奴隷のもの。
艶やかに照る唇の端からは一筋の涎が垂れ、これから与えられる陵辱を待

ちわびているようだ。
やはり、彼女を元の心優しき騎士に戻すのは不可能なのだろうか。
そんな絶望が胸を過った時、大きく開かれた股間に生温かい不気味な感触が走った。
ずりゅっ、ずっぷうううっ！
「んひぃぃっ、くうううう！　そ、そんなぁ……両方、一緒……にィ!?」
魔王の逞しい肉竿を彷彿させる太い触手が二本、幾度の陵辱に襲われてもまだ美しい桃色を保っている膣口と肛門を真っ直ぐに刺し貫いた。
先端や幹胴から止め処なく滲み出る粘液を肉壁へ塗り込みながら、うねうねと激しく蠢きつつ奥深くへと滑り込んでくる。
「あはっ、ああっ、ま、魔王しゃまのお情けぇっ、また私のアソコにズボズボ入ってきてまひゅううっ！」
ほとんど同じタイミングで、セリーヌも二穴を触手に貫かれていた。
粘液と愛蜜、腸液を股間から滴らせながら、歓喜を訴えるように背筋をくねらせて喘ぎ叫ぶ。
素直に快楽を受け入れている親友の姿が、王女の絶望をより濃くした。
「あぁっ、セリーヌ……んふっ、な、中で形が変わって……ふぐっ、おっ、んおおぉっ、ふぁっ、あああ！」
悲しみ嘆く余裕もなく、二穴を突き犯す触手竿の動きが変わった。
真っ直ぐな棒状だった幹胴から、まるで糸のように細い触手が枝分かれして伸びる。膣壁や腸壁のあちらこちらがまるでついばまれるかのように吸われ、その度に全身が痙攣してしまうくらいの強烈な悦楽に襲われた。
「こんなっ、んふっ、あぁっ、ま、魔の快楽……ひぐっ、おっ、んん！」
人と交わることでは決して得られない快感に、フィオナも金糸のごとく美しい髪を振り乱して喘ぎ悶える。
セリーヌの目を覚まさせるため、この悦びに耐えて説得を続けなければいけない。そうわかっていても、敏感なところを探るように肉道へ吸いつく触手の責めに抗えない。
まるで舌のようにベロリと壁面を舐められ、時には歯が立てられたかのような鋭い痛みが走る。
「あひっ、んくっ、ああぁ！　な、中を……味わわれているようなぁっ、こんな……ふぁうぅぅ」
次にどんな刺激を与えられるのか想像がつかず、その不安と恐怖、抱いてはいけない期待に全身の快感神経が活発化してしまう。
容赦ない快楽で女を追い込む魔王の力は、こうして姿を変えても健在だ。
「魔王さま、お情けをっ、あひっ、ひうううっ、んぐっ、ちゅうっ、はぁ、ちゅぱっ、んふっ、れろぉっ♪」
フィオナが自らの無力さに涙している間に、セリーヌは顔の傍に伸びてきている触手竿へ積極的にむしゃぶりついていた。
竿肌から滴る生臭い粘液をためらいなく舐め取り、まるでハーモニカでも吹くかのように咥え、小刻みに痙攣する幹胴を唇で左右に擦る。
その情熱的な奉仕に対する褒美だとでも言わんばかりに、蜜壺と菊門を貫く触手はグネグネと激しく蠢き、より深いところまで入り込んでいく。
「そ、そうれすっ、そこっ！　子宮の中までお越しくださいっ、はへぇっ、ひいいいい、あひぃぃっ」
胎児とともに犯される快感を思い起こしているのか、セリーヌが息を切らしながら恍惚と訴える。
出産を終え、再び元の引き締まった形を取り戻した腹部。そこがボコッと音が聞こえそうな勢いで不規則に隆起し始めた。
「いひっ、ひいいい！　しゅごっ、おおおおっ、魔王さまがぁ、し、子宮で暴れて……はへぇ、んんんー！」
まだわずかに綻んでいたままの子宮口を貫き、肉室の中まで侵入した触手が容赦なく暴れているのだろう。
女にとってもっとも神聖な場所を蹂躙される快感に、セリーヌはだらしなく舌を垂らして喘ぎ狂う。
「セリーヌ、もうやめ……おごぉっ、おおおおお！　わ、わらひっ、までぇっ、はぁ、あああっ……!!」
親友の痴態を呆然と見詰めている間に、フィオナも胎内へ触手の侵入を許してしまっていた。
空っぽになった肉室内をくねる触手で埋め尽くされ、孕んでいた時と同じように下腹がぽっこりとふくらんでしまう。
同時に腸内を埋める触手も大腸まで侵入し、お腹の中が隙間なく埋められる息苦しさに、意識がぼーっと遠のいていくのを繋ぎ止められない。
「わ、わらくひの身体ぁっ、食られる……こんなっ、はぁっ、ううう」
「フィオナぁ、お、おひりも気持ちいいのか……あはっ、魔王さまぁ、私もお願いしまひゅっ、んくっ、ああ」
フィオナが息絶え絶えに訴えるのを聞き、セリーヌがより深い腸内陵辱を望んで引き締まったヒップを振る。
それに応えるように、尻壺を突く触手が胴をふくらませながらシュルシュルと奥深くへと進んでいく。
「あひぃっ、あぁっ、ありがとうございますっ、くふっ、不浄の穴の奥まで貫いていただけてぇ、イイッ、幸せれすっ、ひぐっ、はぁはぁっ♪」
舌を出したまま荒く息を切らす堕ちた女騎士の姿は、牝犬そのものだ。
深い快楽に支配され、もう目覚めることはない。そう思い知らされるような光景に、フィオナの目から大粒の涙が止め処なくこぼれ落ちる。
「わたくしはっ、ど、どうすれば……ひぐっ、くふぁっ、はぁんんっ」
親友を救うどころか、おぞましい破壊神の拘束から逃れることすら、独力では難しい。
救いを求めるように視線を下へ向けるが……そこで繰り広げられていたの

も、目前と同じ絶望の光景だった。
「おやめなさいっ、んふっ、む、胸、わたしの胸……あはっ、ううっ」
エルスは地面に大の字で拘束されたまま、ぎゅうぎゅうと容赦なく乳房の根元を締めつけられる痛みと快楽に悶えていた。
形よい美巨乳が細長く絞り出され、白い柔肌が充血して朱に染まる。
そこへ触手から腐臭漂う粘液がポタリと垂れると、それだけで背筋をのけぞらせてしまう甘い疼きが走った。
（あの時と同じですわ……メイズで……フィオナ様の前でこの乳房を嬲られて、純潔を失った時と）
そう意識すると、手首や足首、ふともも に絡みつく触手がうねうねと蠢くむず痒さの中にすら、悦楽を感じるようになってしまった。
意図的なのか、一切触れられていないはずの秘所がジンと悩ましく疼き、甘酸っぱい香りを漂わせる蜜汁が垂れ流れてくるのが自分自身でわかる。
「い、いけませんわ、このような。わたくしは……同じ過ちを……くふっ、はぁはぁっ、ひいいっ……ああ！」
ようやく洗脳から解き放たれ、フィオナのために今一度槍を振るう機会を得られたのだ。
ここで快楽に押し流されるなど、決して許されることではない。
そう自分を奮い立たせても、グイグイと力強く絞り出される乳房の疼きを振り払うことはできなかった。
「わたくしは、こ、このような辱めには二度と負けませんわ、そう、負けてはならないっ、はぐっ、くうっ」
喘ぎ混じりの声で叫ぶエルスに構わず、別の触手が深い乳房の谷間へ素早く滑り込んできた。
その丸みを帯びた先端が、一瞬の隙を突いて悩ましい吐息を零すエルスの唇を押し広げ、口内まで侵入する。
「むごっ、んく、ちゅうっ、こ、この臭いっ、ひっ、味ぃっ、ううう！」
鼻の奥がツンと来る生臭さと、顔を顰めたくなる苦み。それはメイズの奥で味わわされた、醜いオークのペニスを思い起こさせるものだ。
「はひっ、んちゅっ、はぁ、らめ、この味……か、身体が熱くなるっ、止められないっ、ちゅっ、んちゅう、はぁはぁっ、くふぁっ、んんん！」
無意識のうちに舌が動き、そのおぞましい味の粘液を求めるかのように触手の先端を舐め回していた。
舌全体に苦みとわずかなしょっぱさが染み込んでくるのに合わせ、意識が恍惚と蕩けてきてしまう。
淫熱で子宮が茹り、ゴボリと淫らな音を立てて牝穴から蜜が溢れる。
「んちゅっ、んんっ、どうしてぇ、わたしはっ……んぐぅっ」
オークにマゾだと散々罵られ、言い返すこともできずに悶えた。
それが自分の本質、洗脳を解かれたところで変わらないのではないか。
そんなどす黒い絶望が、高貴な槍騎士の心を少しずつ染めていく。
「違いますっ、んちゅっ、こ、このような……れろっ、ひぐっ、む、胸がぁ……はぐっ、はぁ、はひいい！」
否定しようとしても、豊乳をきつく絞り出され、谷間を粘つく幹胴で擦られる刺激に官能が高まっていく。
ダメ押しとばかりに、さらに二本のどす黒い触手が伸びてきて――ツンと尖る桜色の乳首を押し込むように、双丘の頂点を力強く突いた。
「ひぎいいいっ、む、胸にっ、わたしの胸の中にまでぇっ、ふぁああ！」
ちょうど乳輪ほどの太さの触手は、弛む乳房へ深々と埋まる。
膣壺を突くかのように、粘液をまき散らしながら上下に素早く動く。
「胸……んぐっ、お、犯されてぇ……ひぐっ、あっ、あひっ、ううう」
グニィッと乳肉を突き潰され、敏感な乳突起を押し込まれる。
その度に意識が白く染まってしまうような狂おしい快感が背筋を駆け抜けて、全身の痙攣が止まらない。
「んちゅっ、も、もうっ、わらひっ、んぐっ、れろっ、いけないっ、いけましぇ……んっ、じゅるっ、はぁ、イイ……くっ、イグ、ううう！」
双乳を力強く突き潰され、口内の触手が喉奥まで滑り込んでくる。
口の中が生臭い牡の匂いで満たされて、美豊乳の奥から湧き上がる肉悦が全身に広がってきた刹那。
「くひいいいいっ♪ らぁ、らめ、もっ、おほっ、イグ、んぐっ、ううううううう！」
下品な喘ぎが触手を咥える唇の隙間から漏れ、一切刺激を受けていない蜜園から白濁した潮が盛大に迸る。
独特の淫臭が辺りに広がり、それがエルスにまた快楽に敗北したという現実を嫌と言うほど実感させた。
「フィオナ……さまぁっ、わらひっ、こんな……醜態……んぐっ、はぁっ、あうっ、くううう！ まぁ、まだ動く……まだわたしを辱めようとぉっ、はひっ、んちゅっ、ううう!!」
悔しさと自己嫌悪に涙しながら、エルスは休みなく乳房を犯す触手の動きに翻弄され、嬌声をあげ続けた。
「くううう、は、入ってくる……私の中に触手……おぞましい化け物っ、ああああっ、こんな……っ」
双乳陵辱に屈服したエルスのすぐ隣では、同じく大の字の姿勢で地面に拘束されたドーラが苦しさと快楽の入り交じった声をあげていた。
（フィオナ様、セリーヌ……わ、私も負けません……ここで負けるわけにはいかないのですから……）
宙づりとなっているふたりと同じく、彼女もまた二穴を太い触手で貫かれている状態だ。
膣内を貫く触手の先端は子宮口を押し広げて食い込み、腸内を埋める触手はちょうどS字結腸の辺りまで進んで

きている。
二穴を太く生温かい幹胴で埋められる不気味な感触と息苦しさ。
それは淫祇邪教に牝としてどん底まで落とされた経験のある彼女にとっては、この上ない肉悦となる。
「くふっ、はぁはぁ、私は二度と堕ちない……もうっ、んふっ、ううっ」
不幸中の幸いと言っていいだろう、埋まる触手はどういうわけかそのままの状態で動きを止めている。
激しく突き犯されては、牝の法悦を肉ヒダひとつずつの隙間まで刻まれた身体で耐えきれる自信がない。
その前に拘束を解き、傍らに転がる聖剣を手に立ち上がるのだ。
「女王の盾の誇り、今一度取り戻して見せる。必ずっ……！」
そんな決意を口にした瞬間。今まで不気味なほど沈黙を保っていた触手の幹胴が大きくふくらんだ。
まるで中を球が転がっているかのように、ふくらみは先端のほうへ移動していく。そして――。
ボコッ、ボコボコ。
そんな不気味な音とともに、こじ開けられた子宮口から胎内へ、固いものが転がり込んでくる。
「んごぉっ、おおおお！　こ、これぇ……この感触ぅっ、うううっ!!」
懐かしくもおぞましいそれは、かつて下等な魔物に卵を産みつけられ、気が遠くなるほど繰り返し排泄を強いられた感触に間違いない。

耐えきれず、ドーラの口から下品な喘ぎが漏れると同時に、腸内の奥深くへも生温かい卵が押し込まれてきた。
「おほぉっ、お、おひりぃっ、ケツ穴にどんどんくりゅっ、んふうう！」
硬い卵が腸壁を押し広げ、ゴロゴロと奥へ転がっていく。
少しずつお腹が張って息苦しくなってくる感覚が、尻穴快感を骨の髄まで刻み込まれたドーラにとっては極上の悦楽に思えてしまう。
「はぐっ、くううう！　なぁ、中で卵がぶつかって……おぐぅっ、これ、はぐ、うううう!!」
肉壁越しに子宮と腸内、それぞれに産みつけられた卵がゴロゴロとぶつかり、擦れる。
普通に突き犯されるだけでは決して味わえない独特の刺激。そして無様に触手の苗床にされている屈辱。
洗脳が解けても肉体に深く刻まれた被虐の悦びは拭えない。
「これぇ、んぐっ、こ、この卵をひり出してしまったら、私はぁっ……」
玉座で延々と卵をひり出し、数えきれないくらいの絶頂に達した。
その甘美な屈辱を思い浮かべると、自然と括約筋に力が入る。
「いけないっ、同じ過ちを繰り返すなんて……そんなっ、はぁ、はごぉっ、おおおっ、でもっ、わ、わらひぃっ、くううっ」
小さく首を横に振って抵抗を試みるが、臨月に近い大きさまで子宮と腸に

卵を押し込まれた悦楽に、理性と誇りがグズグズと崩れ落ちていく。
そんな折れかけた心を察したのだろうか。排卵を止めた二本の触手が前触れもなく蠢き、ヒクつく肉穴から素早く抜け落ちてしまう。
「おっほおおおっ！　無理ぃっ、も、もう私っ、マンコとケツ穴パンパンで……耐えられない！　耐えられまひぇんんんっ、んぐっ、ううう！」
ぱっくりと口を開けた膣口と肛門。その解放感に火照る頬を緩めたドーラは、ためらいなく括約筋を締める。
ミチィッ……と肉壺を押し広げる鈍い音とともに、無数の黒い卵が二穴から盛大にひり出される。
「イイイイイイイイッ！　イグッイグッ、ううう！　ひぃっ、久しぶりの排卵アクメぇっ、きてりゅっ、止められないっ、おほっ、おおお！」
愛蜜や腸液とともに、ボコボコと音を立てて排卵を続けるドーラ。
軽く白目を剥いて喘ぐその姿は、堕ちきった牝豚そのものだ。
「けぇ、結局私は牝豚ぁ、浅ましいマゾ豚の……ままぁっ、くううっ、ち、違う……そんな……ああっ」
ドーラは息絶え絶えに悶えながら、紙一重で理性を繋ぎ止めて自分を鼓舞する。
だが、そんな彼女を追い込もうと、触手が卵をひり出し終えた二穴を息つく間もなく再度刺し貫く。
ミチィィッ、ズップウウウ！

「まっ、またっ、もう卵はやめてっ、無理……こんな、これ以上はっ、あああああっ!!」
ドーラ弱々しい訴えに聞く耳も持たず、触手は再び卵を産みつけようと幹胴の一部をふくらませていた。
パチン、パーン！
「いぎぃっ、ううう！　や、やめなさい。こんな……屈辱ぅっ!!」
パァァァンッ！
メイベルローゼの悔しげな呻き声とともに、乾いた打撃音が響く。
頭を太い触手に押さえつけられ、地面に額を擦りつけたまま尻房を高く上げる四つん這い姿勢を強いられている彼女は、別の細い触手によって尻肌を休みなく打ち叩かれていた。
小ぶりなヒップのあちらこちらに赤いみみず腫れの跡が浮かび上がり、ひりひりとする痛みに耐えられず、悔しそうに噛み締めた唇の隙間から断続的に悲鳴がこぼれ落ちる。
「私を……くぅっ、このメイベルローゼ＝オーギュスタンを侮辱するな……見下すなっ、はぎぃっ、ああっ！」
恐怖と誘惑に抗えず、魔王に跪いてしまった。ウォルガードが最後に残した言葉で我に返った今は、自分自身でも許しがたい屈辱。
こうして悪さをした幼子のように尻を打たれるのは、それに勝るとも劣らない強烈な屈辱だ。
「私は魔眼姫……踏みにじる側の人間

なのよ、それなのにっ……ううっ」
尻肌が焼けつくような痛みに苦しみながら、悔しげに呟く。
そんな彼女をさらに追い込もうと言わんばかりに、鞭のごとく尻叩きを続ける触手の動きは熱を帯びてきた。
さらに別の二本の触手が、突き出されたヒップに誘われるかのごとく伸びてきた――直後。
ずぶりゅうううっ、ぬっぽおお！
「あがっ、あああああっ!?」
赤く腫れ上がった尻房の谷間。そこから覗き見えていた膣口とアナルを、力任せに貫いた。
幹胴を濡らす粘液のおかげで深くまで沈んでいくが、解されてもいない肉壺をかき混ぜられるのは、尻打ちに勝るとも劣らない苦痛と屈辱、そして望まぬ快感を生み出す。
「はひっ、くうう！　ふざけないでぇ……こんな……くはっ、ああっ」
息も絶え絶えのメイベルローゼへさらなる屈辱を与えようと言うのか、二穴を犯す触手は一切容赦ない激しさで抽送を繰り返す。
ただ快楽を味わうための道具。肉穴玩具とでも言わんばかりの扱いに、メイベルローゼは血が滲むほど唇を噛み締め、屈辱に肩を震わせる。
「私を、見下すなっ、あふう！　くうう、違う、こ、こんな……どうして感じてるのよ、私はっ」
肉粘膜へすり込まれている粘液に、媚薬のような効果でもあるのか。張りのある触手竿に壁面を擦られ、奥深くを抉るように突かれる刺激に、頭からつま先まで電流が駆け抜けるがごとく快感を覚えてしまう。
そんなメイベルローゼをあざ笑うかのように、取り囲む他の触手たちがうねうねと蠢き、尻を打つ鞭触手の動きに力が入る。
ズブリュッ、ヌプ、パァァンッ！
「ふぁうううう！　あぁっ、ち、畜生、なんで……これじゃっ、ウォルガードの奴に笑われる……ううぅっ！　イ、イイッ……ああああっ!!」
悔しさを悩ましい嬌声とともに吐き出した直後。ズンッと力強く深くまで突き刺さった触手の先端がふくらむ。
どびゅりゅうううううっ！
「きゃふうっ、うう！　なぁ、中に出て……触手ごときの精液ぃっ、し、子宮とお腹に……くうううっ!!」
焼けるように熱く、竿肌を濡らす粘液よりも濃厚でどろどろとした液体が触手の先端から盛大に迸る。
子宮口とS字結腸の行き止まりを打つその感触に、メイベルローゼはツインテールの髪を振り乱して屈辱の絶頂へ押しやられてしまった。
ドクドクと流れ込んでくるおぞましい液体に、お腹の奥まで満たされる。
その感触に背筋が震え、頭の芯が痺れるような悦楽を覚えてしまう自分自身が悔しく、紅い瞳から再び真っ赤な血涙が溢れ出てしまう。
「はぁっ、んんぅっ、い、いい加減にどうにかしなさいよ、フィオナ……セリーヌ……あなたたちにも誇りが少しでも残っているならっ、あひぃっ、て、抵抗してみせなさい……んん！」
呼吸を整える間もなく再び抽送を始める二穴の触手と、尻打ちを続ける鞭のような触手。
その責めに悶絶しながら、魔眼姫は頼みの綱であるふたりを上目遣いで見詰め、叱咤の声を投げかけた。
「そうにゃ……チビオナはともかく、いい加減に目を覚ませにゃ、セリーヌ……ふにゃぁぁっ！」
同じく宙づりのふたりを見上げ、必死の呼びかけを繰り返すミーシャは、秘所をくすぐられるようなむず痒さに、思わず声を上擦らせた。
尿道口を突く細い触手は、穴を弄るように動き続けている。
「何なのにゃ、お前はぁ……どうしてそんなところ……にゃうっ！」
この姿勢でその小さな排泄穴を責められていると、スレアに嬲られた先ほどの記憶が鮮明に甦る。
こうしてトラウマを抉り、心を破壊する。それがこの魔物の思惑なのだろうと想像はつくが、実際に抗おうとするのは簡単なことではない。
「こんなっ、んふっ、いじられるくらいのことで……ふにゃっ、にゃうっ、ううううっ……負けにゃいっ」
先ほどは金属棒を挿入され、より激しく責められたのだ。
この程度のぬるい刺激に屈したりはしない。猫耳少女はそう自分に言い聞かせる。
だが、その瞬間、極細の触手は前戯は終わりだと言わんばかりに針のような先端を蠢く尿道口に押し当て、そのまま細道へ侵入を始めた。
「にゃうっ、ううう！」
触手は大胆に蠢き、狭い尿道内をくすぐるようにしながら膀胱まで到達する。金属棒にはなかったぬめりと、吸いつくような密着感。十分に開発された細穴がねっとりと舐め上げられる快感に、猫耳がピンッと尖る。
全身が泡立ち、脱力してしまう。
「んくっ、やらせるかにゃぁっ、あ、あんな恥ずかしい思いは二度とごめんにゃ……はぁうううっ」
決壊の予感が背筋を走り、慌てて下腹部に力を入れて押し止める。
尿道内で細触手が暴れ、膀胱の中で尿がかき混ぜられる水音がお腹から漏れ聞こえるようだ。
背筋を悪寒と甘美な疼きが、断続的に駆け抜ける。だが、この程度の快感ならどうにか耐えることができる。
「はぁはぁ、いつまでもそうして遊んでいるといいにゃ、その間に……」
セリーヌを正気に戻る方法を考え、破壊神と化した魔王を滅ぼす。
牝悦で茹る頭を必死に回転させ、策を練ろうとしていたミーシャだったが……それも長く続かなかった。
――ずっちゅうううう！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/